

# 香川大学

## インターナショナルオフィスジャーナル

### 第8号

#### 【研究ノート】

大学生の視点から見る海外留学・国際交流プログラムの課題  
— スキルの向上から資質の昂揚に向けて —

杉野 竜美・武 寛子・正楽 藍 …… 1

#### 【実践報告】

カナダのブリティッシュコロンビア州における Developmental Disabilities  
Association の理念と保育内容について  
— Berwick child development centre の実践を中心に —

松井 剛太 …… 15

#### 【短信】

香川大学教育学部幼児教育コースにおける国立嘉義大学との研究交流・学生交流に  
関する報告

松本 博雄・寺尾 徹・高木由美子・宮崎 英一・ポール バテン  
池田 恭哉・松嶋 佳加・高橋 沙彩・山地 一輝・森山 真衣  
野田 恵子・小川 綾花・瀧 寧々・松井 剛太 …… 27

#### 【特集】第6回香川大学・チェンマイ大学合同シンポジウム（2016年8月27～30日）

第6回開催にあたって 徳田 雅明 …… 39

概要 ロン リム …… 41

Social Science and Humanities

Narong Sikhiram・Ratchaneekorn Tongasukdee・Rajchukarn Tongthaworn

Nutjira Busadee・高木由美子・ポール バテン・寺尾 徹・村山 聡

佐藤 明宏 …… 43

Economics and Business

Ravindra Ranade・Roengchai Tansuchat …… 45

Medicine and Nursing

Supanimit Teekachunhatean・和田 健司 …… 47

Engineering

垂水 浩幸・Chayanon Hansapinyo …… 49

Agriculture

川村 理・Tri Indrarini Wirjantoro …… 51

パネルセッション

ロン リム …… 53

ポスターセッション

熊谷 信広・池田紗和子 …… 55

エクスカーション

上田 幸司 …… 57

香川大学インターナショナルオフィスジャーナル発行要項 …… 59

香川大学インターナショナルオフィスジャーナル投稿要領 …… 60

香 川 大 学

インターナショナルオフィスジャーナル

Journal of Kagawa University International Office

第 8 号

Vol. 8

## 目 次

### 【研究ノート】

大学生の視点から見る海外留学・国際交流プログラムの課題

— スキルの向上から資質の昂揚に向けて —

杉野 竜美・武 寛子・正楽 藍…………… 1

### 【実践報告】

カナダのブリティッシュコロンビア州における Developmental Disabilities

Associationの理念と保育内容について

— Berwick child development centreの実践を中心に — 松井 剛太 …………… 15

### 【短信】

香川大学教育学部幼児教育コースにおける国立嘉義大学との研究交流・学生交流に

関する報告

松本 博雄・寺尾 徹・高木由美子・宮崎 英一・ポール バテン・

池田 恭哉・松嶋 佳加・高橋 沙彩・山地 一輝・森山 真衣・

野田 恵子・小川 綾花・瀧 寧々・松井 剛太 …………… 27

### 【特集】第6回香川大学・チェンマイ大学合同シンポジウム（2016年8月27～30日）

第6回開催にあたって 徳田 雅明 …………… 39

概 要 ロン リム …………… 41

Social Science and Humanities

Narong Sikhiram・Ratchaneekorn Tongasukdee・Rajchukarn Tongthaworn

Nutjira Busadee・高木由美子・ポール バテン・寺尾 徹

村山 聡・佐藤 明宏 …………… 43

Economics and Business Ravindra Ranade・Roengchai Tansuchat …………… 45

Medicine and Nursing Supanimit Teekachunhatean・和田 健司 …………… 47

Engineering 垂水 浩幸・Chayanon Hansapinyo …………… 49

Agriculture 川村 理・Tri Indrarini Wirjantoro …………… 51

パネルセッション ロン リム …………… 53

ポスターセッション 熊谷 信広・池田紗和子 …………… 55

エクスカージョン 上田 幸司 …………… 57

香川大学インターナショナルオフィスジャーナル発行要項 …………… 59

香川大学インターナショナルオフィスジャーナル投稿要領 …………… 60

## Contents

### 【Research Note】

- Student views of study abroad and international exchange programs:  
Toward program improvement  
Tatsumi Sugino, Hiroko Take, Ai Shoraku ..... 1

### 【Survey Article】

- The research regarding Developmental Disabilities Association at province  
of British Columbia in Canada: The principle and education  
in Berwick child development centre  
Gota Matsui ..... 15

### 【Short report】

- The report regarding academic and students exchange at early childhood education  
course in faculty of education between National Chiayi University  
and Kagawa University  
Hiroo Matsumoto, Toru Terao, Yumiko Takagi, Eiichi Miyazaki, Paul Batten  
Yukiya Ikeda, Yoshika Matsushima, Saaya Takahashi, Kazuki Yamaji  
Mai Moriyama, Keiko Noda, Ayaka Ogawa, Nene Taki, Gota Matsui ..... 27

### 【Special Report】

- Greetings for the 6<sup>th</sup> Joint Symposium  
between Chiang Mai University and Kagawa University  
Masaaki Tokuda ..... 39
- General Report on the 6<sup>th</sup> Joint Symposium between Chiang Mai University  
and Kagawa University  
Lrong Lim ..... 41
- Social Science and Humanities: Social Environment Studies for Sustainability  
Narong Sikhiram, Ratchaneekorn Tongsukdee, Rajchukarn Tongthaworn  
Nutjira Busadee, Yumiko Takagi, Paul Batten, Toru Terao, Satoshi Murayama  
Akihiro Sato ..... 43
- Economics and Business Ravindra Ranade and Roengchai Tansuchat ..... 45
- Medicine and Nursing Supanimit Teekachunhateanl, Kenji Wada ..... 47
- Engineering Hiroyuki Tarumi, Chayanon Hansapinyo ..... 49
- Agriculture Sessions Osamu Kawamura, Tri Indrarini Wirjantoro ..... 51
- Report on the Panel Session Lrong Lim ..... 53
- Poster Sessions Report Nobuhiro Kumagai, Sawako Ikeda ..... 55
- Field Trip to Higashi-Kagawa City Koji Ueta ..... 57



# 大学生の視点から見る海外留学・国際交流プログラムの課題

## — スキルの向上から資質の昂揚に向けて —

杉野 竜美<sup>1</sup>, 武 寛子<sup>2</sup>, 正楽 藍<sup>3</sup>

<sup>1</sup>神戸大学 大学教育推進機構, <sup>2</sup>愛知教育大学 教員養成開発連携センター,

<sup>3</sup>神戸大学 国際人間科学部

Student views of study abroad and international exchange programs:

Toward program improvement

Tatsumi Sugino<sup>1</sup>, Hiroko Take<sup>2</sup>, Ai Shoraku<sup>3</sup>

<sup>1</sup>Institute for Promotion of Higher Education, Kobe University,

<sup>2</sup>Center for Cooperative Teacher Training Development, Aichi University of Education,

<sup>3</sup>Faculty of Global Human Sciences, Kobe University

### 要 旨

近年、大学の国際化は高等教育の主要なテーマの一つであり、大学生の海外留学や国際交流活動の実態を明らかにすることは、喫緊の課題と言える。本稿では、日本の大学生へのアンケート調査における「学生が考える、留学者に対する企業の評価」と「国際交流活動」に関する回答結果から、大学が提供するグローバルな課題を扱う教育の在り方について検討する。

「学生が、企業人事担当者から在学中の海外留学経験をどのように評価されると思うか」の回答を軸として、「留学や国際交流に関するプログラムの参加状況、そこで得た能力」「外国語を用いて教科を教える授業に関する満足度」について分析した結果、「交流」「スキル」「資質」獲得への期待が読み取れる。外国語運用能力と異文化理解力の向上は不可欠な要素であり、多くの大学で取り組まれているが、課題を挙げるならば、さまざまな期待をもつ学生の参加を促すプログラムの展開を検討すべきだろう。また、諸活動の中で主体性、チャレンジ精神、積極性、柔軟性といった「資質」を伸ばすようなプログラム内容とその評価に重点を置くことが望まれる。

キーワード 大学の国際化、海外留学、学生の視点、留学志向

### はじめに

大学が学生の海外留学や国際交流活動を支援する背景には、世界経済および社会のグ

ローバル化への対応という大学の国際化と、日本の産業界から要請されるグローバル人材育成の2つの側面がある。筆者は、これまでに日本の4年制以上の大学に設置されている国際交流を目的とする部局へのアンケート調査、およびインタビュー調査を実施し、大学が海外留学送り出し支援や国際交流活動を目的とする全学組織を設置し、キャリア支援に関連するさまざまなプログラムを実施している現状を明らかにしてきた(杉野・正楽・武 2016; 正楽・杉野・武 2017)。そこで、本稿では、研究の焦点を学生に移して海外留学を含めた国際交流活動について検討する。これらの活動に学生たちがどの程度参加し、満足感を得ているのだろうか。本稿では、学生へのアンケート調査における「学生が考える、留学者に対する企業の評価」と「国際交流活動」に関する調査結果から、大学が提供するグローバルな課題を扱う教育について検討する。

本稿は、次のように構成される。第2節では、大学生の留学志向(海外留学についてどのように考えているか)と留学への動機付けに関する先行研究を概観し、本稿が日本人学生の海外留学をはじめとする国際交流活動への参加状況に着目する意義を提示する。第3節では、筆者による「大学の国際化と学生生活に関する調査」の概要を述べ、第4節では、本調査の結果を分析する。最終の第5節では、調査結果の分析をもとに、日本人学生による海外留学や国際交流プログラムで獲得する能力観(海外留学による自身の能力獲得に対する評価)を把握し、さらに、彼らの能力観に照らした教育の課題について考察する。

## 先行研究

河合(2009)は留学志向に関する日本人学生へのインタビュー調査を通じて、留学に対する明確な動機を学生にもたせるために、外国人留学生と日本人学生とが交流する機会を充実させたり、留学が卒業の必要要件になるように制度化されたりするなど、学修環境を整備、強化することの重要性に言及している。岩城・野水(2010)による調査においては、学生の多くが留学に興味を示している一方で、就職活動の開始時期が遅れること、経済的な負担が大きいことが理由で留学をあきらめる傾向にあることが指摘されている。また、杉野・武・正楽(2014)による、学生数や立地環境などが異なる2つの国立大学間で分析した先行研究では、次のことが明らかにされている。(1) 留学志向の度合いに関係なく、学生は、留学は将来の職業に役立つと考えており、この結果には大学間における相違はない。(2) これまでの海外渡航経験の有無と留学志向の関連性は低く、この結果にも大学間における相違はない。(3) 両大学において海外留学をするうえで学生が問題として挙げるのは、留学費用と語学力である。(4) 両大学における語学力に関する学生の自己評価は、読む力に対しては高い評価をする一方で、話す力に対しては低い評価をしている。(5) 両大学とも、学生が大学に期待する留学促進制度は、奨学金制度、協定校以外の大学に留学した場合の単位認定制度、外国人留学生との交流の機会の充実、である。この結果

の中でも、とりわけ留学志向の高低にかかわらず、学生は、留学が将来の職業に関連すると考えている点に、大学としてどのような教育支援を提供すべきかに対する重要な示唆を得ることができる。大学は、学生が何を学び、何ができるようになるべきかという、いわゆる教育の質を保証し、学修成果を提示することが求められている近年において、留学を通じて学生は何を獲得することができ、どのような就職先（出口）があるのかを提示することは、大学教育の国際化を推進するうえで極めて重要な課題だと言えよう。

留学への動機づけとして、大学における外国人留学生との交流や接点の有無が、留学志向と関係する（河合（前掲））。池田（2011）も外国人留学生との交流が、日本人学生が海外に目を向ける契機となることから、このような機会を大学が積極的に提供することを提案している。隈本（2014）は、留学への動機づけとなる背景の一つとして、留学を勧める教員や留学経験をもつ友人の存在を指摘する。このことから、すでに海外に留学した日本人学生など、大学における貴重な人材を活用することによって、留学志向を高める契機になると考えられる。

このように、就職が将来の職業に関連すると考えていることが明らかにされ、また、外国人留学生と交流することが、日本人学生の留学志向を高めることにもつながることが指摘された。しかし、留学によって身につくどのようなスキルや知識が就職活動において評価されると考えているのかは明らかにされていない。また、大学が提供している外国人留学生との交流の機会等に対して、学生はどの程度その機会を利用しており、どのように考えているのかについても実状が把握されていない。そこで本稿では、この2点に着目して、学生に対して実施した留学志向と大学生活に関する調査の結果を検討する。

## 調査概要

アンケート調査は、2015年7月から2016年3月、全国の4年制以上の大学に在籍する大学生を対象に、紙媒体とウェブ媒体のアンケート調査票を用いて実施し、910名の有効回答を得た。

回答者の所属する大学を設置区分別に見ると、国立大学595名、公立大学138名、私立大学177名である。所在地域別では、関東①（茨城県、千葉県）1名、関東②（東京）30名、関東③（神奈川県）および中部391名、近畿375名、中国・四国63名、九州・沖縄50名である。大学の分類で見ると、総合大学521名、非総合大学282名である。

回答者の性別は、男性414名（45.5%）、女性495名（54.4%）、不明1名であり、女性の方が若干多いとはいうものの、ほぼ同等と言える。学年は、1年生197名（21.6%）、2年生484名（53.2%）、3年生164名（18.0%）、4年生50名（5.5%）、不明15名である。

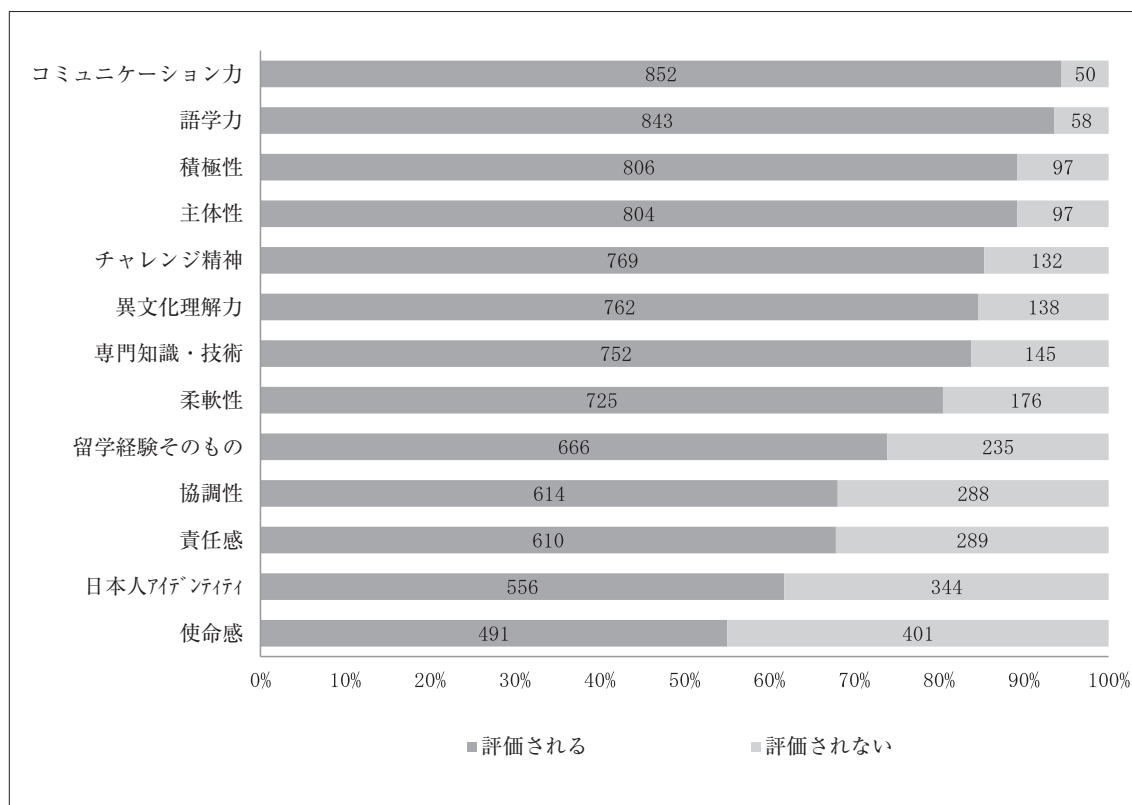


## 大学生の海外留学と国際交流の状況

### 1. 学生が考える、留学経験者に対する企業の評価

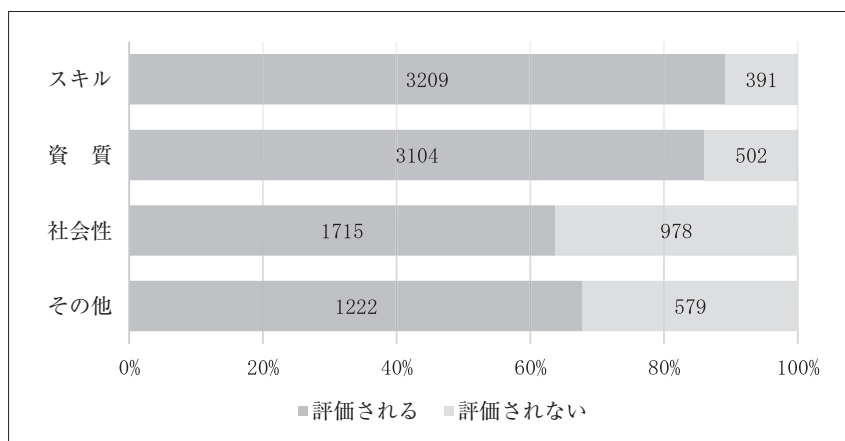
学生が、留学と将来の職業やキャリアパスを関連付けていることは先行研究で確認したとおりである。そこで、就職活動の場面を想定し、留学と将来の職業について、どのように関連付けているのかについて調査した。アンケートでは、「大学生が就職活動をする際、海外留学の経験は企業の人事担当者からどのように評価されると思いますか?」という問いに13項目の回答を提示し、それぞれの項目に対して「思う」「どちらかと言えば思う」「どちらかと言えば思わない」「思わない」のいずれかにチェックを入れる形式をとった。その集計にあたって、「思う」「どちらかと言えば思う」を合わせて『(就職活動時に)評価される』とし、「どちらかと言えば思わない」「思わない」を合わせて『評価されない』とした2つのカテゴリーに分けて示したのが図1である。これによると学生は、コミュニケーション力や語学力といったスキルに関する能力が、企業の人事担当者に評価されると考えている。

図 1. 学生が考える企業人事担当者の留学者への評価①



出典) 筆者

図2. 学生が考える企業人事担当者の留学生への評価②



出典) 筆者

さらに、この特徴を把握するために、類似した項目を集め、4つのグループに分類した。

スキル：語学力、コミュニケーション力、異文化理解力、専門知識・技術

資質：主体性、チャレンジ精神、積極性、柔軟性

社会性：使命感、協調性、責任感

その他：日本人アイデンティティ、留学そのもの

「スキル」は、「～力」と表現できるもので、練習や努力によって獲得できる能力を指す。「資質」は、他者や課題に向けて働きかける際に必要な素養を集めた。「社会性」は、(特に)日本社会で要求されると考えられるものを集めた。「その他」は、上記3グループに分類できない項目である。この4グループで見ると、スキルと資質が評価されると考える学生が多い(図2)。つまり、企業の人事担当者は、海外留学で獲得したスキルや資質を高く評価する、と多くの学生が考えている傾向がある。

では、企業がグローバル人材として求めるものは何だろうか。日本経済団体連合会(以後、経団連)の調査<sup>(1)</sup>では、各企業へ「グローバル事業で活躍する人材に求める資質・知識・能力」に関する質問に対して、①「海外との社会・文化、価値観の差に興味・関心を持ち、柔軟に対応する姿勢」という回答が最も多い。次に多いのは②「既成概念にとらわれず、チャレンジ精神を持ち続ける」、続いて③「英語をはじめ外国語によるコミュニケーション能力を有する」である。①②は資質、③はスキルに該当する。これを学生の考えと比較すると、スキルと資質が逆転している。たとえば、学生の考える留学生に対する企業の評価は「コミュニケーション力」「語学力」といったスキルが上位だが、実際の企業が求めているのは「異文化理解力」「主体性」「柔軟性」に対する姿勢といったスキルおよび資質が上位である。また、経団連の同調査における「産業界が卒業時に大学生が身につけていることを期待する素質・能力・知識」に関する質問に対して、「主体性」(資質)が1番に挙げられており、次に「コミュニケーション力」(スキル)と続いているが、学

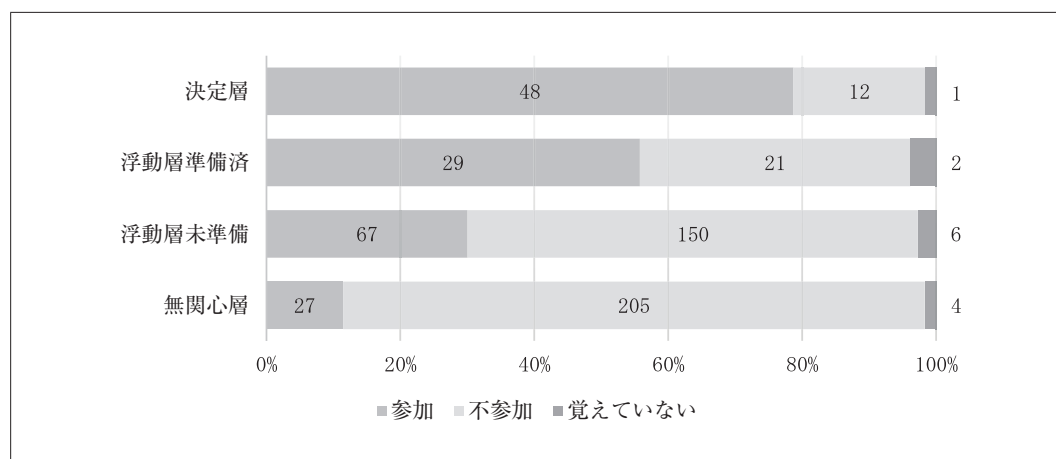
生は「コミュニケーション力」(スキル)が最も評価される項目と考えており、「主体性」に関しては4番目に上がった項目であった(図1)。学生はスキルが求められていると考えているが、企業は資質に期待しているのである。

企業が「卒業時に大学生が身につけていることを期待する素質・能力・知識」として挙げた項目は資質に関するものが多く、これらは客観的にも主観的にも計測が困難なものである。これらをいかに獲得・内面化し、それをどのように表現することができるかは今後の課題である。

## 2. 国際交流活動

次に、学生の所属する大学での国際交流活動参加状況と満足度を分析した。大学での国際交流活動とは、大学(学生や教職員)が実施する外国人留学生との交流会などの異文化理解や国際理解のために開催されている授業以外の活動を指す。まず、学生の留学志向を把握するために、本調査では全学生を次の4つに分類した。①留学が決定している「決定層」、②留学を希望しており準備をしている「浮動層準備済」、③留学を希望しているが特に準備をしていない「浮動層未準備」、④留学には関心がない「無関心層」、である。この分類別に見た国際交流活動参加状況は図3のとおりである。留学志向の高いほど、大学の国際交流活動への参加率が高いことが分かる( $r=.424$ )。

図3. 大学の国際交流活動への参加状況

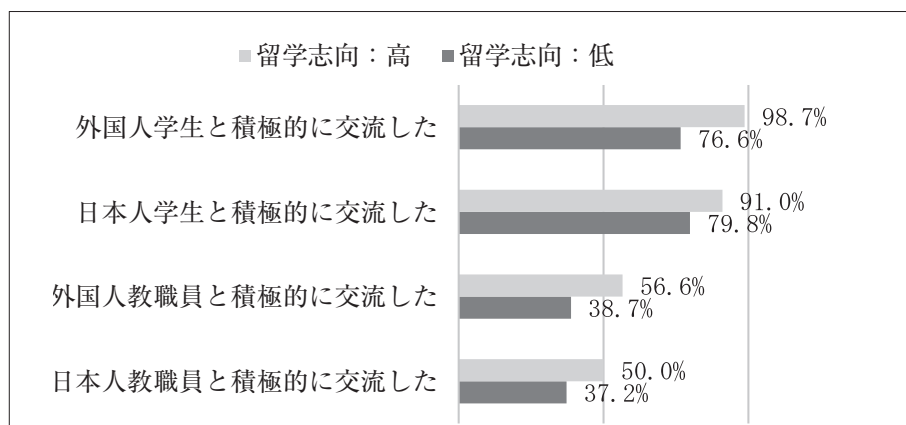


出典) 筆者

$r=.424^{**}$

次に、国際交流活動に参加した学生が、「どのような交流があり、どのような能力を獲得したか」という自己認識を分析した。前述の「決定層」「浮動層準備済」を合わせて「留学志向：高」とし、「浮動層未準備」「無関心層」を合わせて「留学志向：低」としてまとめ、留学志向の高いグループと低いグループに分類し、国際交流活動に参加して経験した交流について尋ねた結果が図4である。

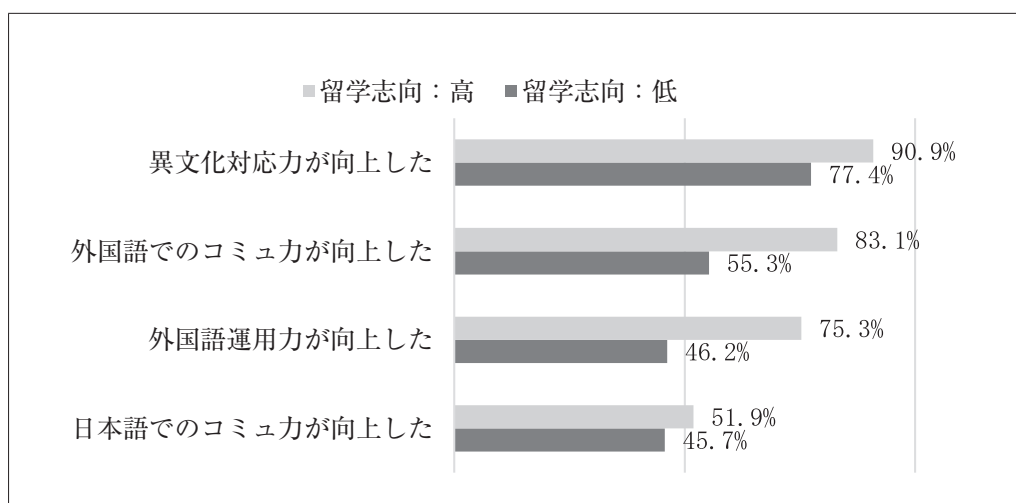
図 4. 国際交流活動における経験：交流



出典) 筆者

留学志向の高いグループでは「外国人学生と積極的に交流した」の回答が最も高い割合（98.7%）を示しているのと比較すると、留学志向の低いグループの同割合は低い（76.6%）。留学志向の低いグループに焦点を当てると、「日本人学生と積極的に交流した」と回答した割合（79.8%）が最も多い。図5は、学生が国際交流活動を通して獲得したと自己認識しているスキルである。留学志向の高低にかかわらず、①異文化対応力、②外国語でのコミュニケーション力、③外国語運用力、④日本語でのコミュニケーション力、という順位でこれらの能力が向上したと自己認識している。

図 5. 国際交流活動における経験：スキルの向上



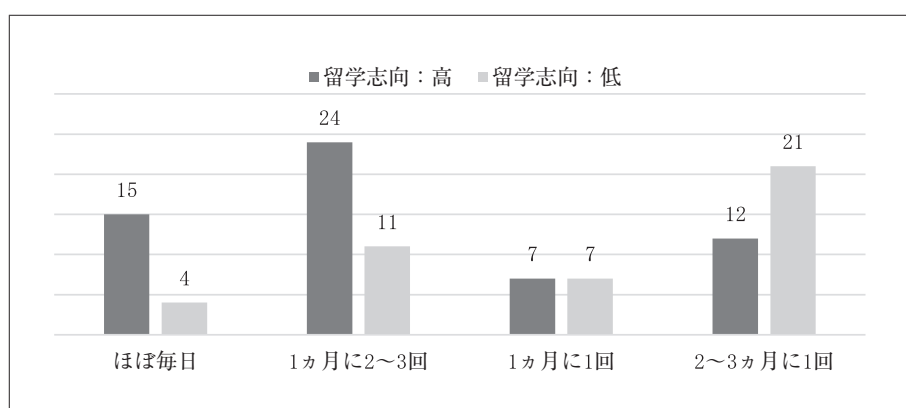
出典) 筆者

図4と図5から分かることは、国際交流活動に参加することで向上したと学生が自己認識している能力は、留学志向の高いグループと低いグループで差異は見られないが、交流

した対象は異なっていることである。このことから、留学志向の高低によって、国際交流活動への参加の意味付けが異なることが推察される。つまり、留学志向の高いグループにとって国際交流活動は、外国人学生との交流のほか、異文化対応力や外国語でのコミュニケーション力、外国語運用力といった国際社会で通用する能力の向上という意味で重要であるのに対して、留学志向の低いグループにとって国際交流活動は、日本人学生や外国人学生との交流、異文化対応力の向上といった交流全般を重要視している傾向が見られる。留学志向によって、国際交流活動から得られると考えているスキルが異なる。大学は、国際交流活動の重層的な意味合いを考慮する必要があると言えるだろう。

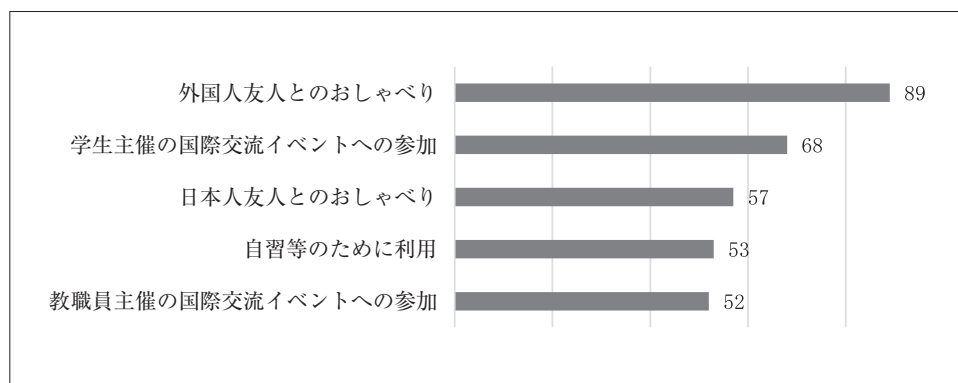
国際交流に関しては、大学（学生や教職員）が実施する外国人留学生との交流会などの異文化理解や国際理解のための活動だけでなく、イングリッシュ・カフェやグローバル・ラウンジなどの名称が付けられている国際交流スペースも重要な空間である。この国際交流スペースの利用状況と利用目的について分析した。大学に国際交流スペースが「ある」と回答した378名のうち<sup>(2)</sup>、国際交流スペースを利用した学生は174名である。その利用頻度は、「ほぼ毎日」19名、「1ヵ月に2～3回程度」35名、「1ヵ月に1回程度」14名、「2～3ヵ月に1回程度」33名である。この利用頻度を留学志向との関連で表したのが図6である。全体としては、「1ヵ月に2～3回程度」「2～3ヵ月に1回程度」の利用が多いが、留学志向別に見ると、留学志向の高いグループでは利用頻度は高く、留学志向の低いグループでは利用頻度がやや低いと言える。ただし、留学志向の低い学生の中には1か月に2～3回利用している者（11名）やほぼ毎日利用している者（4名）がおり、必ずしも留学志向の低い学生が国際交流に関心が低いとは言えないことが分かる。

図 6. 留学志向別、国際交流スペースの利用頻度



出典) 筆者

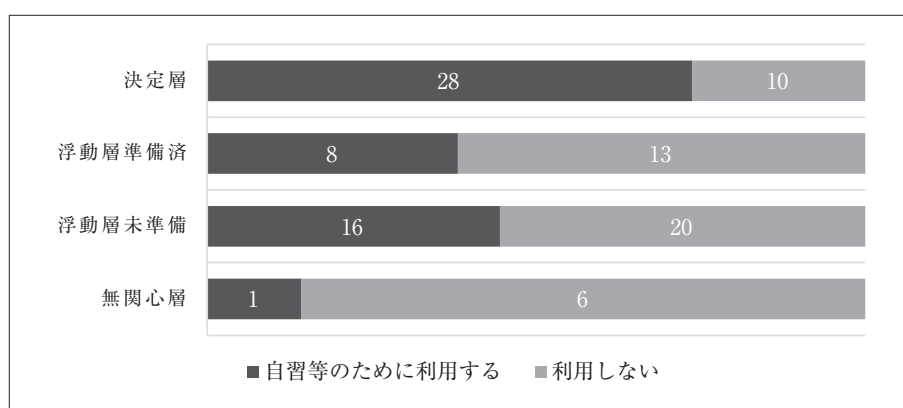
図 7. 国際交流スペースの利用目的



出典) 筆者

国際交流スペースの利用目的については、「外国人の友人とおしゃべりをするため」(89名)が最も多い(図7)。利用目的のいずれにおいても、留学志向による回答の違いは見られない。ただ、国際交流スペースを「自習等のために利用する」の回答に限っては、留学志向別で回答の違いが確認できる( $r=.297$ ) (図8)。決定層では、国際交流スペースを自習等のために利用している学生が28名であるのに対して、無関心層では1名のみであった。国際交流スペースは、その目的の通り国際交流のために利用している学生が多い。加えて、決定層をはじめ、浮動層(準備済、未準備とも)の学生は、国際交流以外の目的であってもこのスペースを利用している。上記の利用頻度と重ねて検討すると、無関心層以外の学生にとって、国際交流スペースが身近な場となっていることが伺える。

図 8. 留学志向別に見た自習等のために利用する学生数



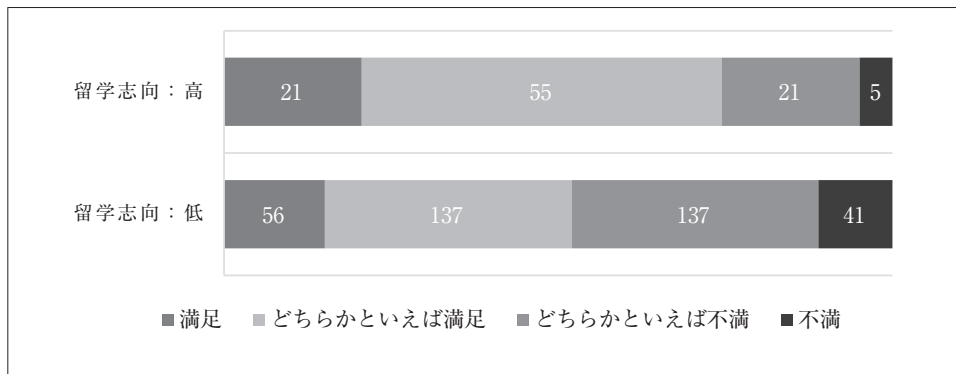
出典) 筆者

$r=.297^{**}$

### 3. 外国語による授業

外国語による授業<sup>(3)</sup>に関する満足・不満感、その理由から授業における国際交流について分析する。

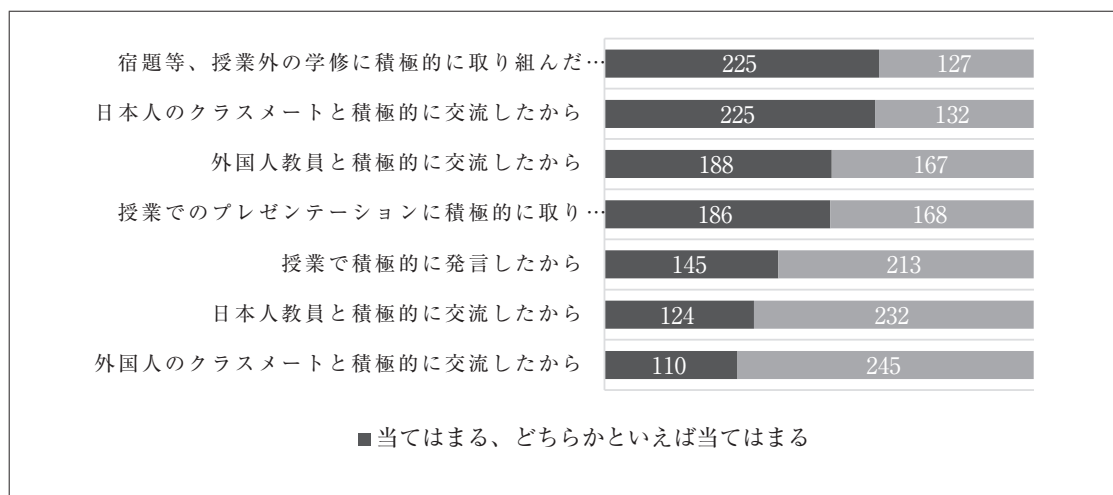
図 9. 留学志向別、外国語による授業の満足・不満感



出典) 筆者

外国語による授業を受講したことがある学生480名の満足度について留学志向別に示したのが図9である。留学志向の高いグループでは「満足」「どちらかといえば満足」と回答している割合が高い。留学志向の低いグループでは、「満足」「どちらかといえば満足」と回答した学生と「不満」「どちらかといえば不満」と回答した学生の割合はほぼ同等である。外国語による授業に満足な理由は、「宿題など、授業外の学修に積極的に取り組んだから」が最も多く、「外国人のクラスメートと積極的に交流したから」を理由と考えている学生は少なかった(図10)。むしろ、「日本人のクラスメートと積極的に交流したから」と回答する学生が多かった。

図 10. 外国語による授業に「満足」「どちらかといえば満足」な理由



出典) 筆者

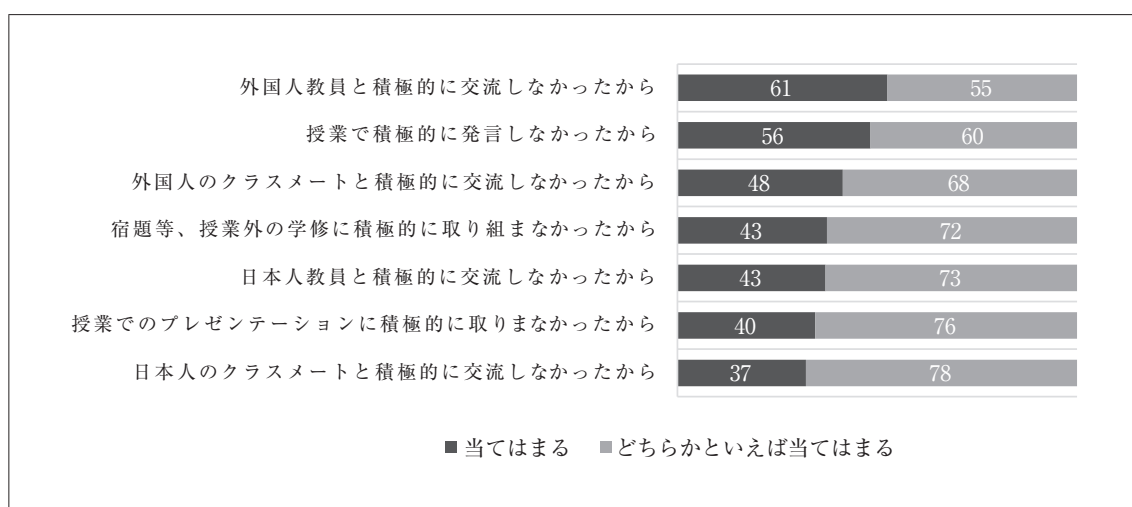
外国語による授業に対して不満な理由は、「外国人教員と積極的に交流しなかったから」が多く、「日本人のクラスメートと積極的に交流しなかったから」という回答が少なかった。

た。上記の満足な理由と照らし合わせると、外国語による授業で日本人のクラスメートと交流することは充実していると考えられる。逆に、外国人の教員やクラスメートとの交流において課題があると言えるだろう。「外国人のクラスメートとの積極的な交流」について、「満足」「どちらかといえば満足」と回答した学生数が少なく、「不満」「どちらかといえば不満」と回答した学生が多い。これは、外国語による授業において、外国人クラスメートとの積極的な交流は活発ではないが、それを期待していると解釈できる。

「授業での積極的な発言」についても同様に、「満足」「どちらかといえば満足」と回答した学生数がやや少なく、「不満」「どちらかといえば不満」と回答した学生が多い。学生は授業中の発言は活発ではないが、その機会を期待している。

外国語による授業に対する不満な理由を見ると、「外国人クラスメートとの積極的な交流」と「授業での積極的な発言の機会」に期待していると言える。外国語による授業に関する調査においても、コミュニケーション力を要する交流といった「スキル」への期待が見られる。

図 11. 外国語による授業に「不満」「どちらかといえば不満」な理由



出典) 筆者

## おわりに

今回我々が実施した、学生の考える留学者に対する企業の評価に関する調査では、第一に「スキル」が重要視されており、次に「資質」が続くことが分かった。その一方で、企業の求めるグローバル人材では、主体性などの「資質」が最も期待されており、次に「スキル」が求められている。また、大学の国際交流活動に関する学生の捉え方を検討すると、留学志向の高いグループを中心に、異文化理解力やコミュニケーション力といった「スキル」の向上を実感していることが確認できた。

これを踏まえて大学が提供するグローバルな課題を扱う教育の在り方について、企業の



求めるグローバル人材に鑑みて検討すると、学生が「スキル」を重要視していることが分かった。また、大学の国際交流活動において、主に「スキル」の点で学生が満足していることが分かった。さらに、外国語による授業に関する調査でも、コミュニケーション力などの「スキル」の面への期待が見られた。

このように大学の国際交流プログラムでは、学生にとって「スキル」面で充実している。更なる国際交流プログラムの発展のために、大学では「資質」の重要性の認識、およびその向上を取り入れることが更なる重点課題と言える。主体性、チャレンジ精神、積極性、柔軟性などの「資質」を伸ばすプログラムを開発し、それらの評価に重点を置くことが望まれる。

## 文末注

- (1) 経団連が実施したアンケート調査は、①事業活動のグローバル化をふまえた産業界の人材ニーズと求める人材の具体像、企業の人材育成への取り組み、②人材育成において産業界が教育機関に期待する取り組み、③人材育成に向けた企業と大学の連携、経団連への要望、を調査している。実施期間は2014年11月25日～2015年2月6日、経団連会員企業・非会員企業463社の回答を集計・分析している。
- (2) 「大学に国際交流スペースがありますか？」の質問に対する回答は次のとおりであった。「はい」378名、「いいえ」88名、「分からない」424名、欠損値20。
- (3) 外国語による授業とは、外国語を教授言語とした一般教育科目、基礎教育科目、専門科目などの授業を指す。外国語を教える外国語科目を除く。日本の大学での外国語による授業とは多くの場合、英語による授業を指し、これは、教育、その他の業務において英語を主要言語としない状況のなかで、英語を教授言語とする教育システムのことである (Rose and McKinley 2017)。

## 参考文献

- 堀田泰司. 2010.「日本人のアメリカ留学離れと21世紀型アジア教育交流の可能性」『留学交流』7月号: 2 - 5.
- 池田庸子. 2011.「海外留学の意義とメリットを考える—海外留学によって何が得られるか—」『留学交流』7月号: 1 - 10.
- 岩城奈巳・野水勉. 2010.「名古屋大学生と海外留学—全学教養科目「現代世界と学生生活」課題レポートから見えてきたもの—」『名古屋大学留学生センター紀要』8: 17 - 22.
- 河合淳子. 2009.「海外留学の動機と制度的制約—日本人学生対象アンケート・インタビューの考察」京都大学国際交流センターアンケート調査班『京都大学における国際交流の現状と発展に向けての問題提起: 第3回アンケート・インタビュー調査報告書』京都大学国際交流センター: 105 - 120.

- 隈本・ヒーリー, 順子. 2014.「日本人学生の海外留学動機づけに関する要因」『大分大学国際教育研究センター年報』.
- (一般社団法人) 日本経済団体連合会. 2015.『グローバル人材の育成・活用に向けて求められる取り組みに関するアンケート結果』  
[https://www.keidanren.or.jp/policy/2015/028\\_honbun.pdf](https://www.keidanren.or.jp/policy/2015/028_honbun.pdf)(最終閲覧: 2017年1月9日)
- 佐藤由利子. 2010.『日本の留学生政策の評価—人材養成、友好促進、経済効果の視点から』東信堂.
- 正楽藍・杉野竜美・武寛子. 2017. 「大学の国際化と海外留学支援制度—留学促進に向けた教育体制構築の必要性—」『大学教育研究』第25号: 103 – 119.
- 杉野竜美・正楽藍・武寛子. 2016.「キャリア形成の視点から見る大学生の海外留学支援体制」『学修支援と高等教育の質保証Ⅱ』山内乾史・武寛子(編), 学文社.
- 杉野竜美・武寛子・正楽藍. 2014.「大学生のキャリア展望をもとにした海外留学支援制度の在り方—日本の四年制大学におけるインタビュー調査より—」『国際協力論集』第21巻第2 & 3号合併版: 121 – 140.
- Rose, Health and McKinley, Jim. 2017. Japan's English-medium instruction initiatives and the globalization of higher education. Higher Education, Vol.73, <http://link.springer.com/article/10.1007/s10734-017-0125-1> (最終閲覧: 2017年3月28日)



# カナダのブリティッシュコロンビア州における Developmental Disabilities Association の理念と保育内容について

## － Berwick child development centre の実践を中心に－

松井 剛太  
(教育学部)

The research regarding Developmental Disabilities Association at province of British Columbia in Canada: The principle and education in Berwick child development centre

Gota Matsui  
Faculty of Education, Kagawa University

### 要 旨

本稿では、著者が視察した内容を含めて、カナダのブリティッシュコロンビア州における Developmental Disabilities Association の理念と保育内容について報告した。Developmental Disabilities Association は、障害児者の有する力を最大限に発揮できるようにすることをミッションとしており、生活している地域を基盤として乳幼児期からサービスやプログラムを受けられる環境を整えるとともに、成人して就労した後も社会の一員として地域に貢献することを理念とし、地域を基盤としたプログラムを子どもの年齢に応じて提供していた。研究の対象とした Berwick child development centre の実践では、利用している家族の文化的多様性に配慮した支援に加えて、子ども一人ひとりの発達に合わせた環境や教具の工夫が行われ、インクルージョンを進めるための合理的配慮が行われていた。これは、教師が保護者と連携をしながら、子どもの発達に応じて検討されたものであり、ブリティッシュコロンビア州の方針であるアダプテーションとモディフィケーションに沿った実践であった。

キーワード：カナダ、インクルージョン、幼児教育、保育

### I. はじめに

カナダは、ロシアに次いで2番目に大きい国土を持ち、10の州（ブリティッシュコロンビア、アルバータ、サスカチュワン、マニトバ、オンタリオ、ケベック、ニューブランズウィック、ノバスコシア、ニューファンドランド・ラブラドール、プリンスエドワードアイ

イランド)と3つの準州(ユーコン、ノースウェスト、ヌナブト)からなる連邦国家である。最大の特徴と言えるのは、移民や難民の受け入れに積極的であり、年間20万から25万人程度の移民を受け入れていること(井出、2014)、そして多文化主義に基づいた政策が行われていることであろう。1971年、連邦政府の首相であったピエール・トルドーによって声明が出され、多文化主義を提唱した(Government of Canada, 1971)。これは、先住民族の権利を尊重すること、またイギリスとフランスの植民地であった影響により、英語とフランス語及び両国の文化を尊重することを提起するものであった。こういった背景の中、カナダは多民族の「同化」を否定し、それぞれの民族における文化を尊重しつつ、国を発展させる方針を理念としている。

カナダでは、各州に首相、内閣、議会があり、大幅な自治権が認められている。幼児教育・保育においても、連邦政府の影響は強いものではなく、各州の専管事項として機能しており、州ごとに政策が異なっている(相良、2008)。本稿の対象であるブリティッシュコロンビア州(以下、BC州)は、カナダではオンタリオ、ケベックに次いで3番目に人口の多い州である。最大の都市であるバンクーバーは、「全ての子どもは、通常の学級で教育を受けることを保証される」ことを教育の基本理念としており、「全ての人間が、互いの相違点と類似点を尊重して、多様な子どもたちがいる地域社会全体を支援する体制の充実を図る」ことを重点課題としている(中島ら、2012)。これは、英語が話せない移民だけを範疇にしているわけではなく、先住民や障害のある子どもも含めて、特別な支援を必要とする子ども(Special needs)すべてを対象にインクルージョンを押し進めるものである。

BC州の保健省(Ministry of Health Services)、教育省(Ministry of Education)、子ども家庭省(Ministry of Children and Family Development)が共同して発行している「特別なニーズをもつ子どもに対する教育実践の枠組み」(Children and youth with special needs: a framework for action)には、目標として、個々の子どもに応じたサービスへのアクセスを改善すること、高い質できちんとした評価の伴った効果的なサービスを提供すること、一貫したサポートのシステムを提供することの3つが挙げられている(Ministry of Health Servicesら、2008)。そして、子どもを中心として家族に着目したサービスの実施のために具体的に州レベル、市レベル、地域レベルでできることが示されている。近年、日本でも、共生社会に向けたインクルーシブ教育システム構築の動向が見られ、幼児期においても合理的配慮のあり方が問われている。しかし、教育実践の現場においては、インクルーシブ教育を実施するにあたり具体的な知見が不足しており、今後の研究や実践の蓄積が必要となっている。

以上のことから、本研究ではカナダのBC州における幼児期のインクルーシブ教育の実践を報告する。とりわけ、Developmental Disabilities Associationの理念と保育内容に着目し、施設訪問による聞き取り内容を含めて検討を行う。

## II. Developmental Disabilities Associationについて

### 1. Developmental Disabilities Associationの概要

Developmental Disabilities Association(以下、DDA)は、1952年にダウン症の子どもをもつ親によって、Association for the Advancement of Retarded Childrenとして、カナダのBC州で設立されたNPO団体である。1998年に現在の名称に変更され、ダウン症だけでなく、自閉症スペクトラム (Autism Spectrum Disorder)、脳性まひ (Cerebral palsy) を中心に幅広く障害児者の支援に携わっている。

現在、BC州のバンクーバーとリッチモンドにおいて、50以上の地域を対象としたプログラムとサービス (community-based programs and services) を提供しており、毎年、1,600人以上の障害児者とその家族がプログラムやサービスを受けている。障害児者の支援を行うものとしては州で最初の組織であり、今日に至るまでブリティッシュコロンビア州における障害のある子ども・成人の生活の質の改善について、大きな社会的役割を担っている。2011年にはバンクーバー市から Access & Inclusion Awardを受賞し、障害児者やその家族に対するプログラムやサービスの提供及びインクルージョンの推進に寄与する団体として、その功績を称えられている。

### 2. Developmental Disabilities Associationの理念とプログラム

Developmental Disabilities Associationは、障害児者の有する力を最大限に発揮できるようにすることをミッションとしており、生活している地域を基盤として乳幼児期からサービスやプログラムを受けられる環境を整えるとともに、成人して就労した後も社会の一員として地域に貢献することを理念としている。そのため、地域を基盤としたプログラムを乳幼児期から成人に至るまで提供している。大きくは5つに分類されており、乳幼児発達プログラム (Infant Development)、幼児・学童プログラム (Children and Youth)、移行プログラム (Transition)、成人プログラム (Adult)、家族サポートプログラム (Family Support) がある。

乳幼児発達プログラムは、0歳から3歳の子どもと家族を対象としている。とりわけ、この時期の子どもの発達においては、家族の役割が重要であることが強調されており、家庭訪問、アセスメント、施設における療育、家庭における療育、親の会の紹介、レスパイトケアなど多岐に渡ったプログラムやサービスが提供されている。幼児・学童プログラムは主に3歳から12歳までを対象にインクルーシブな環境の中での保育・教育プログラムを提供している。またそれ以外にも、余暇活動や子どものレスパイトケアなど保育・教育の場以外の地域社会における活動プログラムが整備されている。移行プログラムは、子どもが施設や学校間を移行するとき、また就労するときなど、それまでの環境から別の環境への移行がスムーズに行われるよう、障害児者及び家族に対して提供されるものである。成

人プログラムは、障害者が親から自立して地域社会で生活できるように提供されるプログラムで、専門家のサポートを受けながら他の障害者と共同生活するグループホームや地域のアパートでの一人暮らしを促すプログラム（Community Apartment Program）、また他者との共同生活を支援するプログラム（Home Share Program）がある。家族サポートプログラムは、障害児者の家族に対してサービスに関する情報提供やサポートを行うものである。また、地域の教育システムのことや障害に関するワークショップなど、親の学習におけるサポートも行っている。親のレスパイトとして、6歳から18歳の子どもを持つ親、19歳以上の子どもを持つ親、それぞれにサービスを提供している。

以上のように、Developmental Disabilities Associationでは、広くソーシャルインクルージョンを達成するために、各年齢や学校段階でサービスが途切れないようにプログラムが実施されている。本稿では、その中で、幼児・学童プログラムを提供している Berwick child development centre の実践を対象とする。

### Ⅲ. Berwick child development centre の実践

#### 1. 施設の概要

1966年にブリティッシュコロンビア大学との共同プロジェクトとして開設された保育施設（preschool）である。当初は障害のある子どものみを受け入れてプログラムを実施していたが、1990年代からは、障害のある子どもに限らず、定型発達の子どものも受け入れて教育を行っている。現在は、ブリティッシュコロンビア大学の研究施設として、教師を始め、心理士や医者等の専門家養成も担っている。

対象は3歳～5歳の子どもであり、88名が所属している。クラスは6クラスあり、3歳から4歳の子どもがいる年少クラスが2クラス、4歳から5歳の子どもがいる年長クラスが2クラス、残り2クラスは異年齢で、一クラス12～16名の子どもで編成されている。クラス編成では、子どもの年齢、各自の能力やニーズ、保護者の希望、子ども同士の関係性、男女のバランスなどが考慮される。

教師は20名で、全員幼児教育士（Early Childhood Educator）の資格を持っている。一部の教師はそれに加えて、乳幼児教育士（Infant and Toddler Educator）、特別支援教育士（Special Needs Educator）の資格も有する。1クラスあたり2、3名の教師が配属されており、特別な配慮を要する子どもの人数に応じて考慮されている。ただし、特別な配慮を要する子どものみを担当する教師はおらず、全員でクラスの子どもたちを担当することになっている。

開所は、9：00から14：00までであり、ほとんどの子どもが週5日通うが、週2、3、4日の子どものも数人いる。多くの利用者は近隣に住んでおり、国籍はさまざまに10～15の異なる言語や文化形態の子どものを受け入れており、施設内にはさまざまな言語が見られ

る（写真1,2参照）。外部から子どもの発達に関わる多くの専門家（地域の保健師、言語療法士、作業療法士、理学療法士、心理士、行動分析の相談員や専門家、乳児の発達に関する相談員、子どもの発達に関する相談員、先住民族の子どもと家族に関するソーシャルワーカー）がやってきて子どもの支援に携わっており、教師や家族と対話しながら、個々の子どもに適した学習環境の検討がなされている。

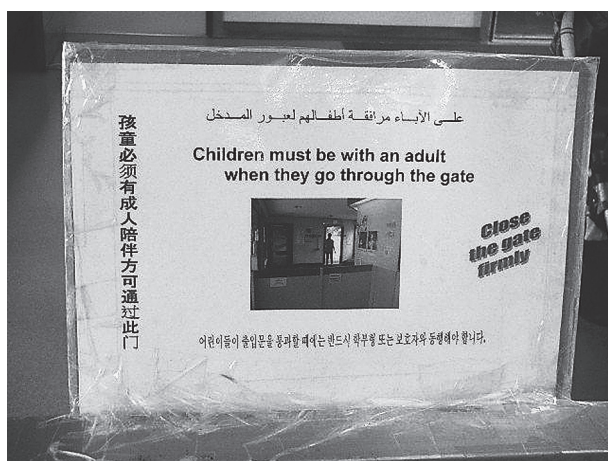


写真1 ゲートの開閉に関する注意書き

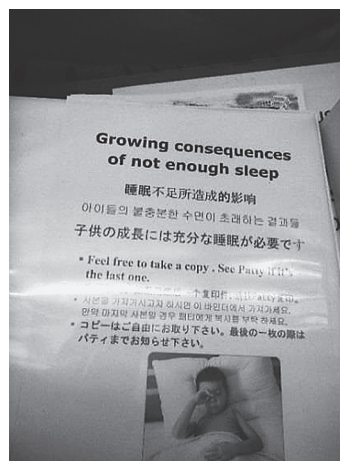


写真2 保護者向けの案内

## 2. 保育内容

### (1) カリキュラムについて

カリキュラムは特に決まったものではなく、BC州の幼児期の学びに関する枠組み（Early Learning Framework）を参考に、各クラスの教師が話し合っそれぞれの子どものニーズに合わせたものを検討する。そのため、大まかな日課（表1）は決まっているが、クラスごとに別々の活動で教育内容が構成されている。基本的な方針は、遊びを基礎として様々な学習機会を埋め込んだプログラムである。算数や科学など科目で分けることなく、すべての要素が遊びの活動の中に含まれるとしている。外での自由遊びの時間は、教師の昼食もしくは休みの時間も含まれている。教師は、話し合いのもとで時間を決めて、子どもと一緒に外で遊ぶ者もいれば、職員室で昼食をとる者もいる。週に数回音楽の教師と体育の教師が来て、特別なプログラムの時間を持つ。カナダの多文化主義の価値観に則り、宗教に関することや、一つの宗教のみに特化した実践は行わない。行事はすべて様々な国の文化が反映されるように行われており、子どもたちが世界の一員であることを認識できるように配慮されている。



表1 Berwick Child Development Centreの日課

9:00	登園、室内での自由遊び
10:30	朝の会、集団活動
11:15	外での自由遊び
12:45	昼食（弁当）
13:30	帰りの会（歌、絵本など）
14:00	降園

(2) 遊具や壁面構成について

子どもの発達において、特に重要としているのは、コミュニケーション、社会的なかわり合い、感覚の認識理解（sensory understanding）である。そのため、教師は、コミュニケーションや社会性のスキルを促すために、支援ツールを使用したり、壁面構成を工夫したりしていた。また、子どもの感覚を刺激するための教材が施設内には数多く準備されており、それを数多く使用していた（写真3-8参照）。

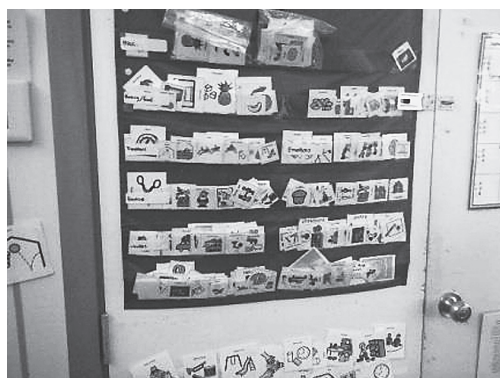


写真3 コミュニケーション用の絵カード



写真4 感情理解のための壁面構成



写真5,6 感覚の認識理解を促すための教材庫

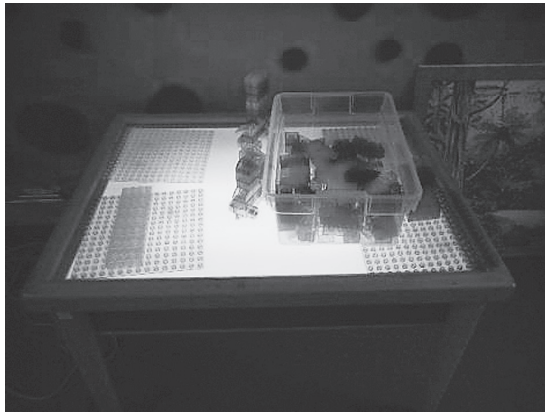


写真7 光るテーブルとブロック

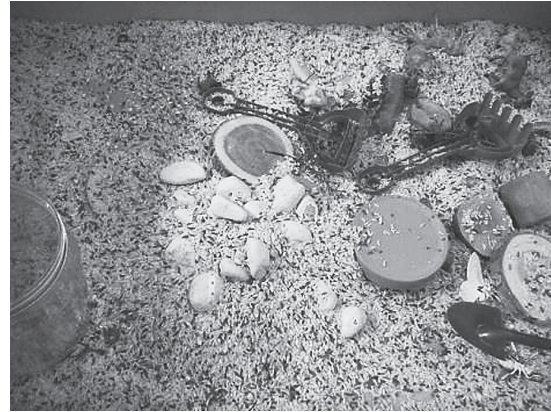


写真8 砂と小豆の混じった感覚遊び

### (3) 個々の子どもの発達への配慮について

Berwick child development centreでは、施設設立の歴史背景からもわかるように、子どもの発達の違いに対する教師の関心が高い。そのため、子どもの障害診断の有無にかかわらず、個々の子どものニーズに応じたコミュニケーションスキル、運動スキル、社会情動的スキル、認知スキルの遅れに十分配慮しつつ、問題行動の軽減につながるようなかわりを行っている。施設内にはそれぞれのスキルを促す教材が多くみられる。

例えば、生活の見通しを持たせるために、クラス全体のスケジュールを視覚的に示し、必要な子どもについては、個別のスケジュールも示していた（写真9,10）。また、身体的に姿勢保持等の困難な子どもたちについては、作業療法士との協議のもとで、ニーズに応じた工夫が考えられていた（写真11-13）。不器用な子どもについては、様々な握り方のできる道具が整備され（写真14-16）、一人で落ち着く空間の必要な子どもや衝動的に部屋の外に出てしまう子どものいる部屋には、そのための工夫がなされていた（写真17,18）。

以上のように、各部屋では所属する子どものニーズに応じた配慮が行われていた。

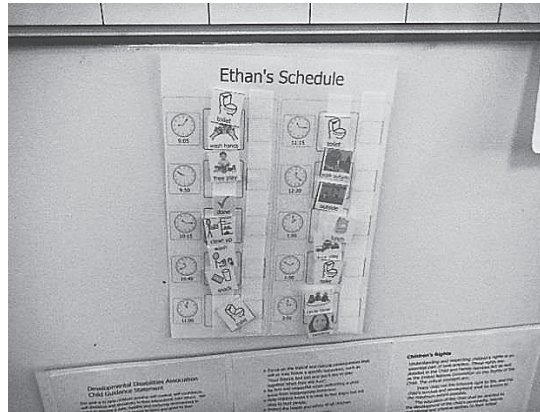


写真9,10 全体のスケジュール、個別のスケジュールに関する視覚的支援



写真11 錘を入れた衣服



写真12 姿勢を支える椅子



写真13 ゴム製の座布団



写真14 グリップの異なるはさみ



写真15,16 グリップの異なる絵筆とクレヨン



写真17 カームダウンの椅子



写真18 開けにくいドアノブ

### 3. 発達に遅れがある子どもに対する支援

発達の遅れが認められて、個別的な支援を要する子どもと判断された場合、子どもの発達を支援するプログラム（The Supported Child Development Program）につなげられて、子どもの発達に関する専門家とともに発達に適した環境が検討される。

The Supported Child Development Programは、地域社会をベースにしたプログラムで、子どもが本人や家族のニーズに合わせてインクルーシブな教育を受けられるように支援するものである。このプログラムは、BC州の各地域で行われており、0～19歳までの子どもを対象としている。“すべての子どもが所属している”というインクルージョンの理念に基づき、家族を中心とした実践と複数の専門家によるチームアプローチによって、プログラムが実施される。

具体的には、①個々の子どもの発達を促すために個別の計画を立てること、②個々の子どもの発達を支えるために、家族と子育て支援の提供者にトレーニングを受ける機会と情報を提供すること、③本、おもちゃ、特別に作られた用具などのリソースを提供すること、④セラピストやスペシャリストなど子どもの発達に関する別のサービスについて情報提供すること、⑤子どもたちがずっと仲間と一緒にいられることを保証するために、場所や人材を提供すること、の5つが行われる。

Berwick Child Development Centreにおいても、このプログラムが必要と判断された子どもに関して、教師は以下の手続きを6ヶ月ごとに行い（表2）、子どもの発達をチェックして支援の提供につなげられるようにしている。

表2 入所後の発達チェックの手続き

入所期間	教師の役割
入所～1ヶ月	<ul style="list-style-type: none"> <li>● インフォーマルな観察によって、子どもが他の子どもや教師、日課及び施設の環境にどのように適応するかを把握する。特に、その子のスキルや能力に対して、不安がどのような影響を及ぼすのかを認識する。</li> </ul>
2ヶ月	<ul style="list-style-type: none"> <li>● フォーマルな観察とチェックリストによる発達評価を始める。</li> </ul>
3ヶ月	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 個別の指導計画（Child and Family Services Plan）を立てるために、家族と家族が認めた者（発達の専門家、他の家族成員など）を交えてミーティングを行う。ここで観察の記録を共有して、その後の6ヶ月～18ヶ月における子どもと家族の目標を定める。</li> </ul>
6ヶ月	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 家族とのミーティングを行い、教育の成果を共有する。</li> </ul>

子どもの行動上の問題に対しては、ABC (Antecedent, Behavior, Consequence) 分析表を使用して情報収集をする。また、動機付け評価尺度 (Motivational Assessment Scale) を使用して、子どもの行動の背景にあるメッセージを理解する。こうした過程を経て、丁寧に子どもの課題を見直すとともに、幼稚園への移行がスムーズに行われるように、家族と共に教育内容を考えていく。

また、それ以外のすべての子どもに対しても、Preschool Profile と呼ばれる発達指標やインターネット上で6歳までの子どもをもつ保護者が実施できる発達チェックリストが使用されている。これらの結果は、定期的に他の専門家と共有して、常に発達の遅れを見逃さないような体制がとられている。

#### IV. おわりに

Developmental Disabilities Associationでは、先述のとおり、主にダウン症、自閉症スペクトラム障害、脳性まひの子どもが対象とされている。そのため、Berwick child development centreにおいても、インクルージョンを進めるにあたり、教室には写真で示したような身体面や情緒面に配慮した工夫がなされていた。こういった工夫は、各教室において、担当している教員が所属している子どもたちのニーズに合わせて、話し合いのもとで考慮されるとのことであった。

BC州では、アダプテーション (Adaptation) とモディフィケーション (Modification) を行うことによって、インクルージョンを進めるという基本方針がある (Ministry of Education, 2009)。アダプテーションとは、教育やアセスメントの方法を一人ひとりのニーズに合わせて変えることで、一人ひとりの学習成果を最大限達成できるように行われ

る配慮のことである。一方、モディフィケーションとは、一人ひとりの指導やアセスメントの結果から見えたニーズに配慮して、一人ひとり異なる達成目標を設定することである。つまり、共通の目標に対して、一人ひとりに応じて教育方法を変えることで目標を達成させる措置がアダプテーションであり、同じ授業の中で、一人ひとり異なる目標を持って、それを達成させる措置がモディフィケーションであると考えられるだろう。このように、一人ひとりに合わせて、アダプテーションとモディフィケーションを柔軟的に実施することによって、合理的配慮が行われている。

Berwick child development centreにおいても同様に、教師は保護者のニーズを聞き取ったうえで、一人ひとりの子どもに必要な配慮を行っていた。インクルージョンと合理的配慮は、全体への教育と個別への配慮というように、集団VS個人と対立的に捉えられる場合がある。しかし、BC州における合理的配慮とは、すべての子どもが学習にアクセスできる状態にすることを指しており、インクルージョンの理念に沿ったものであった。今後、日本においても合理的配慮の実例が蓄積されることが予測されるが、それがインクルージョンに資するものであるのか、十分な検討を要すると思われる。

## 引用・参考文献

Developmental Disabilities Association(2007) history of the association.

<http://develop.bc.ca/wp-content/uploads/2015/11/dda-history.pdf> (2016年12月確認)

Government of Canada(1971). Canadian Multiculturalism: An Inclusive Citizenship.

<http://www.cic.gc.ca/english/multiculturalism/citizenship.asp> (2016年12月確認)

井出和貴子 (2014) 移民レポート5 カナダ：移民受け入れ先進国が直面する問題. 大和総研. [http://www.dir.co.jp/research/report/overseas/world/20141119\\_009154.pdf](http://www.dir.co.jp/research/report/overseas/world/20141119_009154.pdf) (2016年12月確認)

Ministry of Education(2009) A Guide to Adaptations and Modifications.

[https://www.bced.gov.bc.ca/specialed/docs/adaptations\\_and\\_modifications\\_guide.pdf](https://www.bced.gov.bc.ca/specialed/docs/adaptations_and_modifications_guide.pdf) (2016年12月確認)

Ministry of Health Services., Ministry of Education.& Ministry of Children and Family Development (2008). Children and youth with special needs : a framework for action. [https://www.mcf.gov.bc.ca/spec\\_needs/pdf/CYSN\\_FrameWorkForAction\\_Combo\\_LR.pdf](https://www.mcf.gov.bc.ca/spec_needs/pdf/CYSN_FrameWorkForAction_Combo_LR.pdf) (2016年12月確認)

中島修・乾りか・大塚健樹 (2012) カナダの就学前教育について－多文化主義の視点から－. 盛岡大学短期大学部紀要 22, 9-19.

相良亜希 (2008) 1990年代中葉以降のカナダにおける幼児教育・保育施策の特質－連邦・州政府間関係に着目して－. 教育学論集, 4, 27-52.

## 付 記

本研究は、香川大学在外研究制度の助成を受け、筆者が2016年4月から8月にかけて Berwick Child Development Centre に訪問した際の調査をもとに実施された。

## 謝 辞

本研究の実施にあたり、Berwick Child Development Centre 施設長の Diane Burger 氏、及びブリティッシュコロンビア大学の Maria Pighini 博士に多大な支援をいただきました。ここに記して深謝いたします。

# 香川大学教育学部幼児教育コースにおける 国立嘉義大学との研究交流・学生交流に関する報告

松本 博雄, 寺尾 徹, 高木由美子, 宮崎 英一, ポール・バテン, 池田 恭哉  
松嶋 佳加, 高橋 沙彩, 山地 一輝, 森山 真衣, 野田 恵子, 小川 綾花  
瀧 寧々, 松井 剛太  
(教育学部)

The report regarding academic and students exchange at early childhood education course in faculty of education between National Chiayi University and Kagawa University

Hiroo Matsumoto, Toru Terao, Yumiko Takagi, Eiichi Miyazaki, Paul Batten, Yukiya Ikeda, Yoshika Matsushima, Saaya Takahashi, Kazuki Yamaji, Mai Moriyama, Keiko Noda, Ayaka Ogawa, Nene Taki, Gota Matsui  
Faculty of Education, Kagawa University

## I. はじめに

本報告では、香川大学教育学部幼児教育コースの教員及び学生が訪問した国立嘉義大学との研究交流・学生交流について報告する。教育学部幼児教育コースの学生は、幼稚園教諭免許・保育士資格の取得に向け、幼児教育の専門分野（養護内容・保育者論・乳児保育・保育内容の指導法など）の科目を学習している。授業では、文献を通して理論を学ぶ以外にも、赤ちゃんモデルを使った抱き方やおむつ替えの体験や、手遊びやダンスを創作し発表し合うなど実践的な内容も含まれている。また、2年生の時から保育現場での実習が始まり、実践力を身に付ける。卒業後はほとんどの学生が、保育者の採用試験を受けて、保育現場で活躍する。

しかしながら、幼稚園教諭の免許と保育士資格の両方を取得するため、実習の開始時期が他のコースよりも早いことや授業数が多いことに伴い、実習園以外の保育の実際を知らないままに卒業を迎える学生が多い。そのような状況から、学生の中には、一部の保育観や保育方法によって、保育を価値づける傾向があることも否めない。そのため、教員は学生の時期により多様な経験を積むことによって、広い視野を持ってもらいたいと考えていたことも事実であった。

そこで、本報告では台湾の国立嘉義大学への訪問の機会を得た学生が、研究交流や学生交流を行うことによって、どのような気づきを得て、保育に対する考え方にどのような変



化があったのかを示すことを目的とする。

## Ⅱ. 研究交流・学生交流の実際

訪問の日程は、2016年11月26日から11月29日までの4日間であった。教育学部幼児教育コースからは、教員が2名、学部生が4名、院生が1名参加した。また人間発達環境課程から幼児教育コースの大学院に進学する予定の4年生が1名、教育学コースの院生1名も幼児教育の部会に参加し、発表を行った。

実質的な交流が行われたのは、11月27日から29日までの3日間であった。27日は、台湾の文化を知ることと台北から嘉義までの移動のために、いくつかの場所を国立嘉義大学の教員・学生とともに訪問した。28日は両大学の教員及び学生による共同ワークショップを開催し、研究交流・学生交流が行われた。29日は国立嘉義大学の附属幼稚園・小学校を視察し、日程を終えた。3日間の訪問の中で、学生たちはお互いの国の文化、幼児教育の仕組みの違い、そして、学生生活について、交流を重ねた。



### Ⅲ. 幼児教育研究部会での交流

幼児教育の部会は、農学部や本部の立地する蘭潭キャンパスとは異なり、教育学部や附属の教員養成・研修センターのある民雄キャンパスで行われた。両大学の教員や院生による研究発表、そして本学の学生による香川大学教育学部幼児教育コースの紹介や学生生活の実際について、また嘉義大学の幼児教育コースの学生からは、台湾の文化を知る一環として、台湾のフルーツを紹介するプレゼンテーションなどが行われ、意義深い交流をすることができた。嘉義大学の幼児教育コースからは、20名を超える学生が参加して、研究交流・学生交流が行われた。



訪問した直後に、参加した7名の学生にレポートの提出を求めたところ、次のような報告があった。大きく分類すると、①語学力の必要性、②日本と台湾との文化の違いについて、③幼児教育に関する養成段階の免許取得の違いについて、の3点が挙げられる。次に各項目における学生の声を示す。

### (1) 語学力の必要性

- ・台湾の学生の英語力に驚きました。台湾の名前の他にイングリッシュネームという名前を持っていました。どうしてそんなに英語が喋れるのかということ質問したところ、小学校のときから英語のスクールに通っていたそうです。その時に、そこの先生や、親にイングリッシュネームをつけてもらったと言っていました。台湾の学生同士でも英語を使って会話しているのを見て日本では滅多に見ない光景だと思いました。自分自身の語学力のなさを痛感しました。
- ・台湾に行き、台湾で発表や保育をみることで、その国の人たちの考え方の背景や日本との相違点を考えることが出来た。滞在は4日と短く、自分の英語での伝える力のなさから感じ取れなかったことや疑問点はたくさんあるが、台湾での幼児教育を少しだけでも肌で感じ、話を聞いたことは私にとって大きな意味があるのだと思う。これから先、幼児教育について考えていくなかで嘉義大学訪問を通して、感じてきたことを少しずつでもかみ砕いて日本の保育を振り返ることができればと思う。そこからまた、他の国の幼児教育についても考えてみたいと思った。
- ・私は今回初めて台湾に行きました。昔から英語が苦手で、どうにか英語を使わなくていように生活していた気がします。しかし、台湾との共通言語が英語のため、台湾の学生とのコミュニケーションの手段は英語が基本と聞き、とても不安でした。二日目の観光から台湾の学生との交流が始まり、個人差はありますが、台湾の学生は皆スラスラと英語を話す姿に驚きました。台湾の学生と話したいのに、話す言葉が見つからないとき、とてももどかしく感じました。しかし、私の拙い英語でも、単語だけでも、台湾の学生はどうか聞こう、分かろうとしてくれて、スムーズにはいかななくても、コミュニケーションをとることができました。これは、保育でも同じで、子どもが遊びたい、話したい、歩きたいなどという気持ちになれる環境が設定されているということの大切さを改めて感じました。英語の勉強をもっとしていけばよかったという反省もありますが、実際に体験することで、実践力も身につけていくのではないかと思います。
- ・嘉義大学の学生が、とても優しくフレンドリーな性格で私たちを迎えてくれたことがとても嬉しかった。交流の中で見えてきた課題は語学力である。私たちと同じように、幼

児教育を学んでいる学生との交流であったが、母国語のように英語を話したりプレゼンテーションをしたりする彼女たちを見て、「日本人、このままでいいのか」と感じた。日本にいとあまり英語の必要性を感じない。しかし、嘉義大学でのセッション中、興味深い内容であるのに、英語力が足りず、深く理解できなかつたり、議論で発言できなかつたりして惜しい気持ちになった。台湾の学生や先生方のように英語をコミュニケーションツールとして使いこなせると、日本だけでなく世界の人々の意見が聞け、世界の人と議論し合えるのだということを実感し、英語力の必要性を痛感した。日本にいと気付くことができない発見が海外にはあるだろう。英語を身に付けておくと自分の視野が広がるのではないかと感じた。嘉義大学の学生が何人も日本に来たいと言っていることがとても嬉しい。台湾で、同じ夢を目指している仲間ができたことがこれからの私の励みになると思う。お互いに意見交換を続け、さらに交流を深めたいし、将来、それぞれの国の教育を支える人になることが楽しみである。

## (2) 日本と台湾との文化の違いについて

- ・ 今回の台湾訪問では、嘉義大学の幼児教育コースの方々と交流することができ、非常に良い経験をすることができました。交流1日目には観光しながら嘉義大学の学生に街を案内してもらうことで、実際に彼女たちの生活を目にしながら知っていくことができました。特に食事や寺院について詳しく教えてもらい、日本とは異なる文化にとってもわくわくしました。2日目は幼児教育の研究発表会に参加させていただき、両国の先生方、そして院生さんの研究のお話を聞きました。台湾は移民が多く、保育者と多国籍の保護者とのやりとりの難しさや、他の言語や多文化を保育に取り入れる事の必要性についての研究を台湾の方がされており、このような課題は日本にもあるため、興味深かったです。今後これらの研究がどのように進み、どのような結論になるのか、またお聞きしたいと感じました。
- ・ 今回の大学訪問・学生交流を通して感じたことは、日本と違う点が多くありながらも、日本の大学・保育現場と似ている点も多くあったということです。国が違えば環境やシステムも違っているので似ている部分も多くあることにとても驚きました。例えば、日本の大学と同じように大学の中に実習室のような部屋があり、そこに数人の学生が集まって絵本の読み聞かせの練習をしたり、製作をしたりしている場面を見させていただきました。また、その部屋にあった本も日本のものもあり驚きました。
- ・ 自分たちの紹介をすればするほど相手のこともどんどん分かってきて、これもある種の大学交流の狙いなのかなと感じました。嘉義大学の学生のプレゼンテーションでは台湾の果物を紹介してくれました。用意してくれた様々な果物を食べながら、たくさんの嘉

義大学の学生とかかわることができました。その際、私は今回の訪問中一番の歓迎的な雰囲気を感じました。それまでは「お客様」のような対応をしてくれていた気がして、私自身少し緊張していたのですが、嘉義大学の学生のプレゼンテーション中は、対等な学生同士のように感じられて肩の力を抜き、自然といられることができました。

- ・私は今回の嘉義大学訪問を通して他の国で自分たちと同じように幼児教育について考え、学び、実践を行っている人たちがいることを実感した。どの国でも幼児教育に携わっている人たちがいることは当たり前のことである。そして、その事実もインターネットや文献、大学での話の中などで聞いたことはあり知ってはいた。しかし、どこか他人事のようにとらえ、自分とは関係のない出来事のように受け止めている部分が自分の中にあったのだと思う。今回の訪問を通して、そういった海外の幼児教育に携わる人たちと出会い、交流や幼稚園訪問をするなかで日本だけではなく、他の国でも自分たちと同じように保育をして、問題点を考えている人たちがいるということを実感することができた。住んでいる国は違っていても、自分の研究と同じように多文化によって起こる問題を取り上げている研究をしている人がいることを実感したのは自分の目で発表を見られたことが大きいと思う。文献を読むだけではわからないその人自身の思いや考えもほんの少しではあるかもしれないが、感じる事が出来たように思う。国は違っていても多文化で起こる事柄を問題として捉え、考えている人がいることを実感できたことで、また自分の研究をやっていく励みや新しい興味関心の広がりとなった。

### (3) 幼児教育に関する養成段階の免許取得の違いについて

- ・嘉義大学の学生や先生方のリアクションが新鮮でした。中でも、日本の保育士資格・幼稚園教諭免許取得の仕組みが台湾のそれとは大きく違い、とても印象的でした。日本では大学で必要な単位を取得し卒業すれば、資格や免許は取得できますが、台湾では最後の試験に合格する必要があるとのことでした。
- ・日本の保育について発表してみて、当事者の私たちでは気づかなかったところに台湾の方々は反応していて、大学を卒業したら免許がもらえる日本と、大学を卒業したら免許をもらうための試験が受けられる台湾など、どちらが良いかは分かりませんが、自分とは違うものに目を向けることは大切なことだと思います。そうすることで、日本の保育の特徴も見えてくるのではないかと思いました。

また、自身の研究を発表した院生からは、次のような声が聞かれた。院生にとっては、こういった国際的な場における研究発表の経験が大きな意義を持つことがわかった。

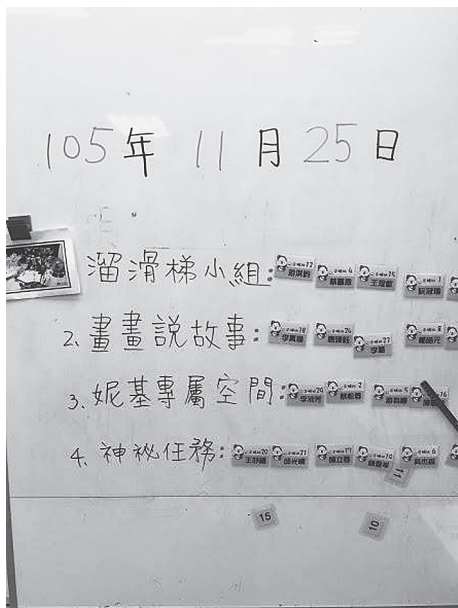
・嘉義大学では、教育学部の学生が附属幼稚園・小学校で教育実習を行ったり、大学の研究者が附属学校園の教員の方々と研究協力等を行ったりと、日本の大学とほぼ同じシステムで教員養成のためのプログラムが実践的に行われています。なかでも、幼児教育コースの学生の今回のワークショップに対する高い関心が窺えました。幼児教育部会では、「いじめ防止対策推進法の下で求められるスクールソーシャルワーカーの役割と可能性」というテーマで発表させていただきました。学校を拠点として行政機関や地域、医療機関と連携し、子どもの貧困問題やいじめ、不登校などの解決に取り組むスクールソーシャルワーカーは、政府が昨年8月に閣議決定した「子どもの貧困対策に関する大綱」で教育支援の柱の一つに位置付けられています。現在対象となっている小学校・中学校の現場では、幼稚園や保育所との連携という形で保育現場にもかかわりをもつこともありますが、その必要性は高まっており、幼稚園や保育所にも対象を拡充するよう求める声も高まっています。合同ワークショップへの参加は私にとって貴重な経験となっただけではなく、先生方をはじめ、学生や院生の方々の研究発表を見学させていただき、大きな学びの場となりました。

#### IV. 附属幼稚園、小学校の視察について

訪問最終日（11月29日）の午前中に、附属幼稚園及び小学校を訪問する機会を得て、教員と学生一同で視察を行った。視察は1時間程度の短い時間ではあったが、園長・校長の説明とともに教室を巡回し、台湾の文化的背景や保育、教育の特徴を聞いた。また、小学生や幼児が運動場でパフォーマンスの練習をしている様子や休み時間の様子などを見ることができた。学生は幼稚園や小学校の環境の違いに関心を示し、日本との違いを肌で感じられる時間となった。以下の写真は、園舎・校舎・グラウンドの環境を示したものである。







聲音的表述  
比比較好 但偏軟  
最後的尾音會上揚 經

教學活動教案設計表

教學名稱	音樂的感愛與色彩	班 別	大班	幼兒年齡	5-6歲
人 數	30人	活動時間	40分鐘	活動日期	105/11/28
活動目標					
1. 能體會及感受音樂的情緒及表現					
2. 能運用肢體動作來表達音樂					
3. 能運用肢體動作打出生動的節奏					
學習目標	活動內容及過程	時間長度	教學資源		
	一、引起動機 理念一開始，老師會先播放聖誕節慶歌曲引起幼兒的注意，並問幼兒們聽到這首歌曲會聯想到甚麼呢？ 播放了聖誕節的相關歌曲之後，老師會接著跟幼兒們說關於在聖誕節發生的一個小故事「胡桃鉗」，講述故事並用胡桃鉗作為背景音樂。	5分鐘	故事、不致勝		
	二、主要活動 1. 肢體動作表現：老師講完故事之後會再次播放胡桃鉗音樂中的進行曲片段，問幼兒們感覺這音樂是發生在左邊？並請他們隨音樂動作表演。 2. 節拍練習：動作表演之後，老師會搬出樂器敲擊器出來，請幼兒們用敲擊器敲出正確的音樂節奏。	30分鐘	和歌、修有奇148、 {這首高段66的拍成}、 S、這這這66吧！		
	3. 合奏：請幼兒們在節奏部點過後，老師會告訴幼兒們今天我們要表演一副小小的芭蕾舞劇，請使用敲擊樂器的幼兒們坐在左右兩邊，動作表演的則在中間並一起分奏完成音樂。		鋼琴、響板、木棒、三角鐵 音樂故事特別66 圖冊、可以拍拍拍、拍圖 你前有一個節奏 故事中的故事		

時間 控管  
聲音響——做動作  
(但沒有聲音音樂)



附属幼稚園、小学校では、壁面構成や施設の環境から学んだことも多かった。学生のレポートからは下記の内容が報告された。

- ・嘉義大学附属幼稚園、小学校訪問では実際の保育現場を見ることができ、台湾の保育の良さや参考にしたいことを多く見つけることができました。特に子どもが遊びに使える素材が多く、それらを使った個性豊かな子どもたちの作品が印象的でした。今後自分の保育にも取り入れていきたいです。
- ・幼稚園参観では子どもたちが園舎で遊んでいる姿を見ることができなかったのが残念だったが、園の中を見学することができた。日本と比較して違いや共通部分などを見ることができたが、中でも良いなと思ったのは、子どもが作った工作を子どもが持って外で撮った写真が飾ってあったことだ。今まで日本で、作品をそのまま飾って名前を添えたり、作品だけ、子どもだけの写真が飾ってあったりした園は見たことがあるが、このような飾り方は見たことがない。この幼稚園のように作品と子どもを一緒に撮ることで、飾った後に「私が作った工作」と自信が持て、名前を読まなくても誰が作った工作



わかるため子どもたちもよく見るようになったりするのではないかと考えた。そして子どもたちも自分が写っていることが嬉しいのではないかと思った。また、外の芝生の上で撮った写真であるため、のびのびとして見えるのも素敵だなと感じた。

- ・ 訪問して日本の保育室と似ている部分も多いことを知ることができた。コーナーで別々の遊びができるようになっている部分や、折り紙で何かをつくっている途中のものが置いてあるなど、日本の保育室の光景と重なる部分があった。しかし、活動ごとに部屋が分かれているところや、ピンインは幼稚園の段階で習うところなど、違いがあるように感じた。この違いはこの附属幼稚園のみのものなのか台湾全土で一般的なのかは分からなかったのだが、違いが面白いと思った。実際の保育の場は遠目からしかみることが出来なかったが、附属幼稚園での幼児教育について保育室を通して少し感じることは出来たのは勉強になった。
- ・ 附属幼稚園に訪問した際には、小学校と併設されていることもあると思いますが、屋外の遊具が多彩であることが印象的でした。特にツリーハウスには感動しました。大人の私たちがさえワクワクし、いつもと違う世界のような雰囲気を味わうことができました。子どもにとっては、このワクワクはより一層大きく、思い出深い体験になると思います。また、訪問を通して学んだことは、日本の保育室との違いでした。保育室の壁際に「相撲ゲーム」という頭の体操用のおもちゃが2つあったり、自由作画のコーナーが本格的だったり、子どものしたいことを尊重しつつ支える姿勢が日本とは少し違い、教育的価値を付加させているのかなと感じました。
- ・ 附属幼稚園と小学校が隣り合っていて、子どもが思わず遊びたくなりそうな遊具がたくさんあり、特にツリーハウスは印象的でした。実際に登ってみると、葉っぱがたくさん描かれていて、大人だけでなく、子どもと一緒に作っているというイメージを持ちました。秘密基地のようなとても楽しい場所でした。また、幼稚園の園舎の中も、子どもの作品がたくさん掲示されていたり、給食は給食室で自園調理されていたりと、日本のようなあたたかな雰囲気を感じました。活動の指導案も見せて頂いたのですが、形式は日本と似ていて、どこの国でも保育を行う際には、計画や事前準備が必要だと改めて思いました。
- ・ 幼稚園、小学校見学に行かせていただいて日本とは違った様々な光景を見せていただくことができました。日本と同じ10分間の休み時間でしたが、日本の小学校よりも自由な雰囲気で元気いっぱい体を動かして園庭で遊ぶ姿を見ることができました。子どもたちが、たったの10分でもめいっぱい遊びたくなるような物的環境や人的環境が整備

されている証拠だと思いました。幼稚園では、子どもたちが実際に保育室で遊んでいるところは見ることができませんでしたが、保育室内の環境整備をしっかりと見させていただくことができました。保育室に入った時の第一印象は、“もの”が多いということです。天井からつりさげているものが多く、どこにいても何かしらの製作物が視界に入ってくるといった様子でした。日本は、壁面に装飾が多くみられますが、台湾は天井から紐をぶら下げてそこにも製作物がありました。子どもたちが作った作品が、保育室の中にたくさんあるなあと思いました。日本の保育室は室内だけに製作物を飾っているという印象がありますが、台湾は廊下(部屋の外側の窓)にも子どもたちがつくったものを飾っていました。また、日本とはちがって、色付きの粘土があって驚きました。また、台湾の方たちは皆さん優しく接してくださいました。育ってきた国は違っても、同じ夢を志している同じ世代の学生と交流することができ、新たな発見や刺激があり、とてもよい経験になりました。

- ・ 附属幼稚園と附属小学校の見学に分かれ、私は附属小学校の見学に参加させていただきました。校舎はとても広く、廊下には世界地図やアルファベットなど工夫を凝らした掲示物が並び、運動場や校庭の遊具、図書館、図工室等の教科ごとの教室や設備も大変充実していました。特に、英語教室では、触れると音が鳴ったり、自由に書き込みをしたりすることができる電子黒板が導入され、教室の四方の壁には英語で書かれたカラフルな掲示物があったり、英語の絵本を読むことができるスペースもあったりと、まるで英会話教室のように子どもたちが楽しみながら英語を学習できるような工夫が随所に見られました。日本では、平成23年度より、小学校において新学習指導要領が全面实施され、第5・第6学年で年間35単位時間の「外国語活動」が必修化されていますが、英語教室や電子黒板の導入といった設備はまだまだ充実しているとは言えないのが現状です。国際教育に特化した英語カリキュラムが行われている附属小学校からは、多くの学びを得ることができました。台湾は、OECDの最新の学習到達度調査(PISA2015)では科学的リテラシーにおいて全参加国・地域中4位、数学的リテラシーでは5位の日本を上回る4位であり、IEAの最新の国際数学・理科教育動向調査(TIMSS2015)でも小学校・中学校ともに3位と日本を上回っています。そのような点からも、附属小学校の見学をさせていただけたことはとても貴重な経験となりました。

## V. おわりに

今回の訪問は学生たちの刺激となり、保育に関することはもちろんのこと、両国の文化背景を含めた学生生活の違いや語学に関する意識の違いなどを感じることができたようであった。日本でも、多様な家庭背景をもつ子どもたちを含む保育のあり方が検討されて久

しい（ト田、2015）。しかし、現実的には外国籍の子どもが保育所や幼稚園にいるケースには地域差が大きく、養成段階でも熱心に取り組まれているとは言い難い現状にある。今回のように他国の文化や保育に触れる経験が、学生の養成に資するようになっていくためには、教員にも国外の保育事情を理解するなど、国際感覚を身に付ける必要があるだろう。そのためには、今回の訪問をすべての学生に広げるとともに、授業のあり方等も再考する必要があると思われる。

今回は残念ながら幼稚園のほうでは実際の保育活動を見学することはできなかった。お互いに保育の実際を視察したうえで議論を行うことによってさらなる深まりが期待できるだろう。これは今後の研究交流・学生交流の持ち方の課題ともいえるかもしれない。

### 引用・参考文献

- ・ト田真一郎・平野知見・臼井智美・戸田有一（2015）多文化状況の相違による多文化共生保育実践の多様性のM-GTAによる検討．乳幼児教育学研究、(24)、21-37.

### 謝 辞

今回の訪問にあたり、国立嘉義大学の教員や学生の皆様が快く受け入れてくださったことに感謝申し上げます。また学生も含めた訪問を企画してくださった香川大学インターナショナルオフィスの先生方にも心より御礼申し上げます。最後に、今回の訪問にあたって、一部の教員及び学生が教育学部国際交流委員会とインターナショナルオフィスから資金の援助を受けました。ここに記して深謝申し上げます。

## Greetings for the 6<sup>th</sup> Joint Symposium between Chiang Mai University and Kagawa University

Masaaki Tokuda, MD, PhD

Vice-President, Kagawa University (International Affairs)

Congratulations for the friendly partnership since 1991 when the MOU was concluded between Chiang Mai University (CMU) and Kagawa University (KU). CMU has been one of the most important partner universities for Kagawa University (KU) for 25 years, and our close relationship created the atmosphere of the necessity of joint symposium to introduce researches of both universities. The 1st joint symposium was decided to be held in 2007 in Chiang Mai with enthusiasm and was very successful to create international collaborations between CMU and KU. The 2<sup>nd</sup>, 3<sup>rd</sup>, 4<sup>th</sup> and 5<sup>th</sup> Joint Symposium were held in 2008, 2010, 2012 and 2014, respectively.

President Dr. Niwes Nantachit and President Dr. Seigo Nagao met in Chiang Mai at 5<sup>th</sup> Joint Symposium in 2014 and at 50<sup>th</sup> Anniversary of Chiang Mai University in 2015 and agreed that we have had friendly and productive relationship in the past years, and that we have to further strengthen educational and research collaborative activities. They addressed the 6<sup>th</sup> Joint Symposium shall be very important to make a new step for the next generation. To ensure the future activities run smoothly, the MOU between CMU and KU was renewed on 6<sup>th</sup> September, 2016 signed by the two presidents (see next page).

Kagawa University hosted the 6<sup>th</sup> Joint Symposium in Kagawa from 27<sup>th</sup> to 30<sup>th</sup> August, 2016 under the theme of “Healthy Aging and Sustainable Society”. CMU sent more than 40 participants to the symposium including 10 graduate students, and actively participated in various activities together with KU researches and students. Many outstanding research outcomes including those produced by CMU-KU collaborations were reported. In addition, new buds of collaboration research were born.

Besides academic presentations, an excursion tour to Higashi Kagawa City was provided on 27<sup>th</sup> April prior to the academic part of the symposium, and it provided instructive information of KU’s challenge to CMU participants to revitalize the local community by working together with local government and people.

This article provides the summary of the 6<sup>th</sup> Joint Symposium which hopefully brings hints for the next organizing committee of the 7<sup>th</sup> one in 2018 in Chiang Mai.

Let me conclude the preface by expressing my hearty appreciation to all participants and all staff and members of the organizing committee for their contribution to the successful completion of the symposium.

Sincerely yours,



**General Memorandum for Academic Cooperation and Exchange  
between  
Kagawa University, Japan  
and  
Chiang Mai University, Thailand**

Kagawa University and Chiang Mai University hereby agree to conclude the following agreement on academic exchange between the two universities for the purpose of promoting education and research.

1. The two universities will carry the following specific activities to extend and promote academic and cultural exchange between the two universities.
  - (1) Exchange of faculty members, staffs and researchers
  - (2) Exchange of students
  - (3) Joint research
  - (4) Lectures, talks and symposiums
  - (5) Exchange of academic information and references
  - (6) Other activities which are agreed upon by the two universities
2. All necessary matters regarding the activities in the Clause 1 shall be carried out through the mutual exchange of information and deliberation between the two universities.
3. This agreement shall remain in effect and continue in force for a period of five years from the date it is signed by duly authorized representatives of both universities. Furthermore, this agreement may be renewed for a further term subject to the mutual agreement of both universities.

During the term of this agreement, either university may terminate this agreement by giving written notice six months in advance to the other side.
4. Details of this agreement may be revised or amended at any time by mutual consent.

This is a revision and update of "GENERAL MEMORANDUM FOR ACADEMIC COOPERATION AND EXCHANGE BETWEEN KAGAWA UNIVERSITY, JAPAN AND CHIANG MAI UNIVERSITY, THAILAND" (1990.4.24).

Kagawa University

Chiang Mai University

Seigo Nagao  
Seigo Nagao, M.D., Ph.D.  
President

N. Nantachit  
Clin. Prof. Niwes Nantachit, M.D.  
President

Date August 28, 2016

Date September 6, 2016

# General Report on the 6<sup>th</sup> Joint Symposium between Chiang Mai University and Kagawa University

Lrong Lim, International Office

Kagawa University was privileged to host the 6<sup>th</sup> Joint Symposium during the period 27<sup>th</sup> to 30<sup>th</sup> August 2016. First and foremost, due to the unfavorable weather, CMU President Niwes, Vice President Rome, and Assistant President Avorn had to cancel their flights to Japan. On behalf of President Niwes, Assistant President, Dr. Piyapong stood in to conduct the formalities.

The main CMU delegation arrived at Kansai International Airport on late evening of 26<sup>th</sup> August, Friday. Two KU staff members welcomed the delegation and accompanied them by limousine bus to Takamatsu, arriving in the early hours of 27<sup>th</sup> August, Saturday.

After breakfast, KU conducted the excursion trip to East Kagawa City, whereby the CMU delegates were introduced to the yellow tail fish farms, among other attractions. Many delegates were impressed to witness how the yellow tail fish were processed. In the evening, CMU delegates enjoyed a meal of Sanuki udon, cooked in the local, traditional manner.

The Symposium officially kicked off on the morning of 28<sup>th</sup> August, Sunday. President Nagao presented a welcome address to the CMU delegates, while CMU Assistant President Piyapong thanked KU for the hospitality and for hosting the event. The Poster and Parallel Sessions were conducted thereafter. The Welcome Banquet was held at the Hanajukai Hotel.

The second day, 29<sup>th</sup> August, Monday, was filled with presentations at the Parallel Sessions for all the five sub-themes. In the evening, the Farewell Banquet was conducted at Hotel Righa Zeist. The highlights were the presentation of the Best Poster Awards to the students, followed by a dance performance by the Thai graduate students of KU.

The final day consisted of Parallel Sessions, as well as the overall Panel Session. After lunch at the University Cafeteria, the CMU delegates were led to a shopping mall in the city. After some shopping, the delegates headed for Kansai International Airport in the evening.

As in previous symposiums, there were some minor hitches, but on the whole, the event proceeded smoothly. The KU Faculty of Economics played a big part in organizing and executing the excursion event. The Parallel Sessions were well handled by the Chairs from the respective faculties. We appreciated their valuable assistance and thank them for their excellent cooperation.

We thank Takamatsu Convention Bureau, for the financial assistance rendered. This assistance enabled us to provide the necessary accommodation facilities, among other services to the CMU delegates.

And of course, last but not least, much gratitude is also due to the staff members of International Office and the Administrative Group for all the hard work put in.

We look forward to the 7<sup>th</sup> Joint Symposium, which is slated to be held at CMU in 2018.

## Social Science and Humanities: Social Environment Studies for Sustainability

Narong Sikhiram<sup>1</sup>, Ratchaneekorn Tongtukdee<sup>2</sup>, Rajchukarn Tongthaworn<sup>2</sup>,  
Nutjira Busadee<sup>2</sup>

<sup>1</sup>Faculty of Humanities, Chiang Mai University, <sup>2</sup>Faculty of Education,  
Chiang Mai University  
sikhiram@hotmail.com

Yumiko Takagi<sup>4</sup>, Paul Batten<sup>4</sup>, Toru Terao<sup>4</sup>, Satoshi Murayama<sup>4</sup>, Akihiro Sato<sup>4</sup>  
<sup>4</sup>Faculty of Education, Kagawa University  
ytakagi@ed.kagawa-u.ac.jp

Oral presentations for the Social Science and Humanities were held on August the twenty-eighth and twenty-ninth. Our session proved a great success with the participants, eighteen professors and two students. We had fourteen oral presentations and one poster presentations. There was lively debate amongst all the presenters and students.

The focus of the two Humanities sessions covered a wide range of areas: language acquisition, student exchange programs and other areas of the presenters' research. Ideas and research from both Japan and Thailand were presented and commented on. It was very beneficial to listen to and compare our areas of research from varying perspectives. Furthermore, as a result of our collaborations until now, we also found research issues in Thailand parallel to those we are facing in Japan.

### **1) Human geography**

Based on the 'Living Spaces' project further development of collaboration is expected in future.

Furthermore, extra research in the future will be with the Mae Khong river regions as the base research study. Another work is about the successful Kagawa community enterprise model and trying to use this model in OTOP management in Thailand.

### **2) Special Needs Education Collaboration**

Focusing on 'Resource Rooms' in Japanese schools, and the screening processes in place in Japan for selecting students for early intervention and guidance. We hope to continue



a focus on this area. The CMU Faculty of Education has an Early Childhood Education and Special Needs course – this is one area for further research and collaboration in the future, a focus on SNE in Japan to match the students' developmental stages from kindergarten through to high school. What kind of developmental educational support is needed before intervention and what kind of on-going support is needed? It is essential to locate issues at an early stage in infants in order to provide appropriate support before the problems become severe and to continue this until it is determined that assistance is no longer required. Approaches to these issues vary from country to country, and more effective solutions can be found through joint research.

Resource Rooms are a special feature of SNE in Japan. Robust Special Needs Education Systems can be brought about by combining the best of what is available internationally. Accordingly, a hands-on approach is essential and affiliated schools at both our institutions can be expected to play a part in this.

### **3) Joint student exchange programs.**

We have three types of Joint student exchange programs. JASSO funding has enhanced two program – providing funding for both the CMU and the KU students. KU students go to CMU in September and March for two weeks. CMU students come to KU in July for one month and get credits for their course here.

### **4) Possible future collaboration with the Japanese Centre at CMU.**

KU students majoring in Japanese as a second language will be teaching at the center at CMU. This is one field of possible future development.

Finally, as a result of this session in the social science and humanities, we can hope for further increased collaboration and cooperation between our two universities and it is hoped that the fieldwork and links with other institutions that were included in the program this time will also prove to be beneficial to all participants in the future.

## Economics and Business

Ravindra Ranade and Roengchai Tansuchat

Faculties of Economics, Kagawa and Chiang Mai University respectively.

ranade@ec.kagawa-u.ac.jp and roengchaitan@gmail.com

The faculties of Economics of CMU and KU have been interacting regularly for the past 5 years or so. At this symposium we had some additional faculties participating in the Economics and Business sessions. We had 11 presentations 6 from the KU side (represented by faculties of Economics, Law and the Administrative Bureau of the Engineering) and 5 from the CMU side (represented by the faculties of Economics, Business Administration, Science, Art Media and Technology, apart from co-authors). We divided the papers into 3 sessions roughly on the basis of the themes being General Economics and Tourism, Business and Econometrics. This allowed for people with common interests to get together for discussions.

The first session had papers on how Gandhi had thought of rich business houses as Trusteeship for the welfare of people, how international organizations and their policies affect the higher education across the countries, on the role of Stakeholders and long term returns in the Thai Stock Exchange, how innovations and creativity is driving sustainable tourism in Thailand, how art festivals are impacting on the tourism of the Setouchi area and the last one on the Sustainability problems of maize industry in Thailand.

The second session was a short one with two presentations on Business. The first was on the auditors and the trust issues and psychological comforts of listed companies in Thailand and the other was Business development processes of Japanese Apparel Industry.

The third session was rather eclectic and had presentations on high level Statistics, Econometrics and Index making. The first was on optimal portfolio problem in Thai stock market, using the Copula model with GARCH insights. The second was on Causality problem based on the famous work of Abraham Wald and his test. The third dealt with problem of unequal Income Distribution and suggested a way of measuring the level of happiness using an Index based on parameters.

The interaction with each other went on all the 3 days of the symposium. There were student papers from the CMU side but none from the KU side. Questions were

asked and improvements were suggested by the audience in all the 11 presentations. And we are sure that they were useful for the presenters for their future work. We also had a session for discussing the possibilities of future collaborations between various faculties.

The only unfortunate part was that the symposium was held on a Sunday and Monday morning which meant that there was minimal participation from other members of the faculty. A logistics problem, hopefully dealt well in the future symposia.

## Medicine and Nursing

Supanimit Teekachunhatean<sup>1</sup>, Kenji Wada<sup>2</sup>

<sup>1</sup>Faculty of Medicine, Chiang Mai University

<sup>2</sup>Faculty of Medicine, Kagawa University

We are pleased to inform you of the success of the Medicine and Nursing session held in the latest 6<sup>th</sup> Joint Symposium between Kagawa University (KU) and Chiang Mai University (CMU) conducted on 27-30 August 2016 at KU. In this session, 14 delegates from the Faculty of Medicine (FM) and the Faculty of Agriculture (FA) of KU and 8 CMU delegates from FM, Faculty of Nursing (FN), and Faculty of Associated Medical Science (FAMS) gave oral presentations. The session covered a wide range of topics related to the sub-theme: "Aging and Lifestyle-Related Diseases" including rare sugars, telemedicine, vaccination, herbal medicine, diabetes, stroke and hemiplegia. Remarkably, excellent presentations on the latest outcomes from the JICA Grassroots Technical Cooperation Project were included. More than forty KU and CMU numbers actively participated in this session, and discussions were so dynamic that it often overran the schedule. The symposium afforded an excellent forum for discussing the results of joint research conducted by the two institutes and for comprehensive planning for future collaboration.

At the beginning of the session, the 10th Anniversary Ceremony between FM, CMU and FM, KU was held on Sunday afternoon in the presence of Prof. Seigo Nagao, the President of KU, Prof. Piyapong Niamsup, and many VIPs from both universities. The ceremony provided an opportunity for the two universities to renew and update the Memorandum of Understanding (MOU), first signed in 1990, which mainly emphasizes student exchange and research collaboration. Prof. Katsumi Imaida, Dean of FM, KU and Prof. Watana Navacharoen, Dean of FM, CMU signed and exchanged the "Declaration of Continued Partnership", in which two faculties were proud to declare that both will help each other and work together to make the next decade of our partnership even stronger for our countries. Additional future collaboration in the form of student exchanges between KU and CMU was proposed. This extended collaboration is expected to involve, among other activities, a dual Ph.D. degree program, course/credit transfer as well as an exchange program for Ph.D. students, residents and fellows. In addition, a rapid increase in research collaboration between KU and CMU

involving several research clusters is anticipated. Professors from KU or CMU were cordially invited to visit each other, to increase interaction and cooperation in research, skills, and knowledge. In the latter part of the ceremony, Prof. Masaaki Tokuda, Vice President, KU, and Prof. Kom Sukontason, Associate Dean for International Exchange, FM, CMU made presentations that we reflected in the past 10 years' activities list. The ceremony was concluded with presentations made by representatives of the exchanged students.



## Engineering

Hiroyuki Tarumi\* and Chayanon Hansapinyo\*\*

\*Faculty of Engineering, Kagawa University

\*\*Faculty of Engineering, Chiang Mai University

tarumi@eng.kagawa-u.ac.jp

chayanon@eng.cmu.ac.th

We had three Engineering sessions on Sunday, August 28<sup>th</sup> (“Engineering 1”) and Monday, August 29<sup>th</sup> (“Engineering 2” and “Engineering 3”). Authors of this article chaired all of these sessions. The number of presentations was fourteen. Three of them were from Chiang Mai University (CMU) and others were from Kagawa University (KU).

In the “Engineering 1” session, three presentations were given from KU. Authors of all these papers were PhD course students from China in the Division of Advanced Materials Science, Graduate School of Engineering. All papers were on electronic materials and co-authored by their director Prof. Qi Feng.

In the “Engineering 2” session, two presentations were given from CMU and two from KU. All papers were given by professors, and topics were on architecture and environment engineering.

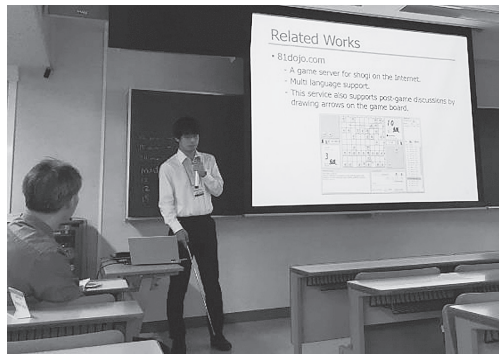
Finally, in the “Engineering 3” session, seven presentations were given, only one of which was from CMU. Two of the KU presentations were given by professors. Three of the KU presentations were given by KU’s master course students. Other two were given by PhD course students: from CMU and KU (from Viet Nam). Topics widely covered construction engineering, plasma engineering, robotics, and computer science.

Although papers covered very broad technical fields and, in many cases, the audience were not familiar with the presented topics, discussions after the presentations were relatively active. The chairpersons greatly appreciate all the participants’ cooperation.

Many of the papers were presented by students. We believe that the workshop was a great opportunity for their experiences in English presentation and academic and cultural exchange with students from other countries.

However, we still need improvements in engineering sessions. First, it would

be better if the number of participants were balanced between the two universities. Second, the target research fields should be considered in order to activate the academic discussions. Of course we know that it is difficult to solve these problems because of the limitations of budget, schedules, and personal circumstances. However, we should try to organize more fruitful sessions at the next workshop.



Presentation by a master course student  
from KU (computer science)

## Agriculture Sessions

Osamu Kawamura<sup>1</sup> and Tri Indrarini Wirjantoro<sup>2</sup>

<sup>1</sup>Faculty of Agriculture, Kagawa University and <sup>2</sup> Faculty of Agro-Industry,  
Chiang Mai University

The Agriculture Session of the Joint Symposium focussed on We, Dr. Osamu Kawamura (Kagawa University, KU) and Dr. Tri Indrarini Wirjantoro (Chiang Mai University, CMU), discussed and set 'Agriculture, Bioscience, Food Science, and Environmental Science for Healthy Aging and Sustainable Society' as the agriculture section title, and raised subjects. There were 7 subjects presentations from Kagawa University and 8 presentationssubjects from Chiang Mai Universitywere submittedtothesession. The Agriculture Section was divided into three sessions and held at 15:00-17:50 on 28<sup>th</sup> August (Chair persons, : Dr. Osamu Kawamura, KU and Dr. Saisamon Lumyong, CMU), at 10:40-12:00 on 29<sup>th</sup> August (Chair persons: chair persons, Dr. Kazuya Akimitsu, KU and Dr. Wasu Pathom-Aree, CMU), and 15:20-17:00 on 29<sup>th</sup> August (Chair persons: chair persons, Dr. Takeshi Katayama, KU and Dr. Tri Indrarini Wirjantoro, CMU). In everyEach session benefited from the attendance and participation of , many faculty members and students, and an wereparticipated and active exchange of opinions was accomplishedoccurred. By Through these exchanges of opinions, mutual understanding could be deepened. It was is expected that this will lead to new collaborative investigations couldbestarted and further exchanges between students in the futureas well.

However, the field of Agriculture Section is was broad. Participants (faculty and students) from Faculty members and studentsfromChiang Mai University were participatedfrom three faculties, namely Agro-Industry, Agriculture, and Science. The contents of presentations from Kagawa University and Chiang Mai University did not necessarily match. In this these cases, it was difficult to doconduct deep discussions. To deepen increase the interchange in the researchmore, and to do more collaborative investigationmore, it may be necessary to seta specific topics (, e.g. which is for example, fermented food, vegetables produce, cereals produce, rare sugars, etc.) or others, and raised subjects in one each of the specific topic sections of the divided three sessions of Agriculture Session. In For the 7<sup>th</sup> Jjoint symposium Symposium KU and



CMU, it is necessary for the needed that chair persons of KU and CMU in Agriculture Section to be early selected early, and have the specific topic and the focus of the presentations determined and raised subjects. If a specific topic session will be held in 7<sup>th</sup> Joint Symposium joint symposium KU and CMU, we think the joint symposium will evolve with more effective mutual cooperation programs.

We thank all of you who had participated in the 6<sup>th</sup> Joint Symposium joint symposium KU and CMU in Kagawa, 2016. We are looking forward to meeting everybody again in Chiang Mai, 2018.

## Report on the Panel Session

The 6<sup>th</sup> Joint Symposium between Chiang Mai University and Kagawa University

Lrong Lim, International Office

Following the practice of previous Symposiums, the Panel Session was held as the final segment of the event.

There were four panelists each from CMU and KU. In this report, rather than writing on what every speaker spoke on, I would like to briefly summarize some notable points forwarded by the panelists from both sides.

Professor Masaaki Tokuda (Vice President International Affairs, KU) introduced the '4 & 1' Plan of Kagawa University to the CMU delegates, followed by a note on the Olive Square, its functions, and the Sanuki Program. Touching on the latest developments in rare sugar research, he related that we are advancing into Thailand through meeting up with the Thai authorities. He closed by proposing that KU and CMU continue to work together in the area of health.

Dr. Komgrit Leksakul (Director, Research Administration Center, CMU) commented that Thailand is also fast becoming an aging society, and that the topic is highly relevant. According to him, CMU is undertaking a variety of initiatives. Among them are the improvement of education for students with disability, the focusing on the economics of tourism, and the focus on robotics in the engineering field. He also touched on the possibility of joint projects in Laos and Myanmar, in cooperation with JICA.

Dr. Komgrit presented what looked like a SWOT (Strengths, Weaknesses, Opportunities, and Threats) for KU and CMU, which I thought, merit more consideration by both parties. He talked about the number of collaborative papers between KU and CMU over the past 10 years, and compared the productivity of research by KU and CMU researchers. He finished by talking about the research strategies of CMU in Environment and Energy, Food and Health, and Creative Lanna.

Among other speakers, Professor Hirotoshi Tamura (Faculty of Agriculture,

KU) presented mainly on the area of Food Safety, and the Short Stay program for international and Japanese students.

Professor Saisamorn Lumyong of the Faculty of Science, related on the collaboration between CMU and KU on rare sugars, and the associated problems. She suggested that there should be more joint efforts in this area through the exchange of students and staff members.

Professor Ravindra Ranade of the Faculty of Economics took the audience back to the earlier joint symposiums whereby communication proved to be a problem. He also talked about the joint efforts of the KU and CMU staff members from the Economics area in conducting classes for students from both institutions.

In the area of Social Science and Humanities, CMU Faculty of Humanities Assistant Professor Narong Sikhiram presented on the project collaborations between CMU and KU. With the assistance from JASSO, he hoped that there will be more two-way student flows into both our institutions in the future.

Professor Hiroyuki Tarumi from the Faculty of Engineering presented on the exchange of students and professors between CMU and KU. He also talked about two joint projects currently being conducted, and on the Double Degree Program between CMU and KU in the field of Engineering.

The final speaker, Professor Kom Sukontason from the Faculty of Medicine, proposed the possibility of launching a Double Degree Program for doctorate students in the medical area. Research may be conducted in both CMU and KU. To facilitate this exchange, it would be good if accommodation facilities can be offered.

## ポスターセッション

### Poster Sessions Report

Nobuhiro KUMAGAI, Sawako IKEDA

Kagawa University, International Office

E-mail :kumagai@kagawa-u.ac.jp, kokusai@jim.ao.kagawa-u.ac.jp

#### Poster sessions report

Poster Presentations were held at the 6<sup>th</sup> Joint Symposium between Kagawa University (KU) and Chiang Mai University (CMU) Kagawa University Saiwaicho-campus Room D1 & D2 on 27<sup>th</sup> August, 2016. Total poster presentations were 36 in which Chiang Mai University submitted 10 and Kagawa University 26. The president prize was awarded to Ploykwan Jedeejit of CMU the title of presentation is “Innovation and Creativity Cultural Capital on Wellness knowledge in Thailand for Sustainable Tourism”.

#### Method of presentation

On the first day of the symposium before the opening ceremony all presentation posters were gathered and displayed at designated study rooms on campus. During the poster session, all presenters had a chance to explain the summary of their own poster for two minutes.

#### Method of best selection

All symposium participants received a voting ballot during the reception which indicated all of the presenters' names and poster titles. They checked best three on it.

All participants were able to choose three best their choices during the 1<sup>st</sup> day of the symposium. The poster session implementation team prepared 7 awards, such as the president award for best poster presentation, the vice-president award for second best and dean awards for the remaining 5 selected posters.

The implementation team considered three special judges such as president, vice-presidents, and CMU representatives who had 5 points each.

## Awards

The total numbers of voters were 101 persons out of 160 total participants and the results of the awards are as follows.

## **BEST POSTER AWARD**

	Title	Name	Affiliation
PRESIDENT PRIZE	Innovation and Creativity Cultural Capital on Wellness knowledge in Thailand for Sustainable Tourism	Ploykwan Jedeejit	CMU
VICE PRESIDENT PRIZE	Analysis of the effect of D-allose on Itea plants	Norio Tsuji	KU
DEAN PRIZE	Sustainability in Chiang Mai's Maize Production Management: A Holistic Approach	Supalin Saranwong	CMU
DEAN PRIZE	Selection of Cordyceps militaris Isolates for Rice-based Medium Cultivation	Naradorn Chui-Chai	CMU
DEAN PRIZE	Role of hepatocyte nuclear factor-5 in high glucose-induced augmentation of proximal tubular angiotensinogen	Wang Juan	KU
DEAN PRIZE	Lifetime Improvement by Extended LEACH with Energy Harvest in Wireless Sensor Network	Takaaki Onishi	KU
DEAN PRIZE	D-Allulose and D-allose production by D-allulose 3-epimerase and L-rhamnose isomerase from <i>Shinella</i> sp. NN-6 and characterization of D-allulose 3-epimerase	Chiho Nozaki	KU

## **References**

Kagawa university home page:

[http://www.kagawa-u.ac.jp/files/8814/7548/2146/ION\\_No.15\\_Web.pdf](http://www.kagawa-u.ac.jp/files/8814/7548/2146/ION_No.15_Web.pdf)

## Field Trip to Higashi-Kagawa City

Koji Ueta

Administrative Group, International Office

soryucet@jim.ao.kagawa-u.ac.jp

Kagawa University organized “Field Trip to Higashi-Kagawa City” on the first day of this symposium (27<sup>th</sup> August, 2016), and 39 participants joined this event.

Higashi-Kagawa City, located at the east edge of Kagawa Prefecture, has been well known for its “Glove” business – its share ranks at the top of the market in Japan. Also, fish farming of “Hamachi (Yellow tail fish)” in Japan first succeeded here, and “Sanuki Wasanbon (Refined sugar)”, a long-term traditional business since the Edo era has been known as well.

In recent decades, this city has been facing rapid depopulation and aging. For these problems, of course the city office has implemented a variety of measures, but also Kagawa University (mainly student groups) has been involved in problem solving in suggestion and advisory.

On this day, participants visited the following places, and got an explanation from the representatives at each location. At any place, participants were warmly welcomed and could observe the field. Especially, at Aioi-Chiku District, Thai participants had the opportunity to share their opinions regarding mutual regional matters with the people in the district community. This experience was very fruitful for both sides to think on the local problem.

<i>13:00-13:40</i>	<i>Gloves Museum Tour</i>
<i>13:50-14:40</i>	<i>Marre Ricco Fishing Pond Tour and Fish Feeding</i>
<i>14:50-15:30</i>	<i>Aioi-chiku District Fieldwork</i>
<i>17:30-19:00</i>	<i>Dinner at Tamoya On'na Dojo (Udon)</i>

Finally, we would like to express our deep appreciation to Higashi-Kagawa City

Office members and all related people who smoothly arranged their tour and warmly welcomed all participants.



Explanation from the City Officer  
at Gloves Museum



“Hamachi” filleting Display



Meeting with Aioi-Chiku  
District community members



Group photo at the Udon noodle shop

## 香川大学インターナショナルオフィスジャーナル発行要項

### 第1 目 的

香川大学インターナショナルオフィス（以下「オフィス」という）の目的に従い、オフィスの事業に関わる教育・研究の活性化、留学生及び国際交流に関わる施策の充実を図るため、『香川大学インターナショナルオフィスジャーナル』を刊行する。

### 第2 内 容

未発表のもので、日本語・日本事情教育、異文化教育、留学生教育、国際交流等、香川大学インターナショナルオフィス規則第2条に定めるオフィスの目的に沿うものとする。

### 第3 編 集

次項に定める編集委員会が行う。

### 第4 編集委員会

- (1) 委員はオフィス教員で組織し、委員長はインターナショナルオフィス長をもって充て、副委員長はオフィス専任教員から選定する。
- (2) 会議において必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、意見を聞くことができる。
- (3) 研究論文及び研究ノート1篇につき、査読委員2名を選定する。

### 第5 投稿要領

香川大学インターナショナルオフィスジャーナル投稿要領の通りとする。

### 第6 発 行

原則として、年1回とする。

### 附 則

この要項は、平成21年12月1日から施行する。

### 附 則

この要項は、平成23年11月29日から施行する。



## 香川大学インターナショナルオフィスジャーナル投稿要領

### 第1 趣 旨

この要領は、香川大学インターナショナルオフィスジャーナル発行要項（以下「要項」という）第5に基づき、香川大学インターナショナルオフィスジャーナル（以下「オフィスジャーナル」という）への投稿に関し、必要な事項を定めるものとする。

### 第2 投稿者の資格

- (1) 香川大学（以下「本学」という）教員（非常勤職員及び非常勤講師を含む）
- (2) 香川大学インターナショナルオフィス（以下「オフィス」という）教員との共著論文等における上記以外の者
- (3) その他、編集委員会（要項第4の組織。以下同じ）が認めた者

### 第3 投稿内容区分

下記の5種類を設ける。この内、どれに当たるかは投稿者が自己申請し、編集委員会が審議する。なお、編集委員会の判断により、下記以外の種類で掲載することもある。

- (1) 研究論文
- (2) 研究ノート（研究論文として十分な論証をするまでには至っていないが、中間的・暫定的に発表しておきたいもの）
- (3) 実践報告
- (4) 短信（新しい見解や解釈、提言や批判、学会動向／参加報告、調査報告等、呈示発表しておきたいもの）
- (5) 書評

### 第4 使用言語

日本語又は英語とする。

### 第5 原稿規格

- (1) 原稿の長さは、1篇につき、図・表・写真・注・参考文献等を含め、A4版用紙40字×35行、20ページ以内とする。英文の場合もこれに準ずる。
- (2) 原稿が20ページを超える場合は、編集委員会の判断による。
- (3) 刷り上がり1ページ目は、研究論文等（第3のものをいう。以下同じ）のタイトル、著者名、所属、要旨（400字程度、英文の場合は200語程度）、キーワード（5語）を含むものとする。ただし、研究論文等の内、(4)短信と(5)書評については、要旨

及びキーワードの記載は必要ない。

- (4) 注・参考文献等は原稿末尾に一括して掲げるものとする。
- (5) 参考文献等は、著（編）者名、発表年、書名・論文等のタイトル、ページ、発行所を記載する。
- (6) 本文のフォントは 10.5ポイント、英文の場合は12ポイントを標準とする。
- (7) 和文、英文とも指定のテンプレートを使用すること。

## 第6 提出原稿・書類

投稿にあたっては下記の原稿及び書類等を提出する。なお、提出された原稿及び書類等は原則として返却しない。

- (1) 原稿 1部
- (2) 香川大学インターナショナルオフィスジャーナル投稿申込書 1部
- (3) (1)と(2)を添付した電子メール、または(1)と(2)のデータを記載した CD-R等の電子媒体

## 第7 提出先

原稿及び書類等は編集委員会委員長宛てに提出する。

## 第8 提出期限

発行に応じて、別途定める。

## 第9 取り扱い

第3の内、(1)研究論文と(2)研究ノートについては、編集委員会においてその取り扱いを下記のいずれかに決定する。

- (1) 採録
- (2) 条件付き採録
- (3) 採録否

## 第10 校正

校正は編集委員会のコメントに基づき、投稿者において速やかに行うものとする。

## 第11 抜き刷り

抜き刷りが必要な場合は投稿時に申し出ること。投稿者には投稿原稿1篇につき抜き刷り 30部を無料で呈する。

## 第12 著作権

- (1) 掲載された研究論文等の著作権はオフィスに帰属する。
- (2) オフィスは、掲載された研究論文等を電子的な手段で配布する権利を有する。
- (3) 投稿者が掲載された研究論文等を自身の著作物に掲載したり、電子的な手段で公開、配布したりすることは認められる。ただし、オフィスジャーナルに掲載されたものであることを、号数等を含めて明示しなければならない。その場合、できるだけ速やかにオフィスへ連絡する。

## 第13 その他

この要領に定めるものの他、投稿に関し必要な事項は編集委員会が定める。

### 附 則

この要領は、平成 21 年 12 月 1 日から施行する。

### 附 則

この要領は、平成 23 年 11 月 29 日から施行する。

<編集委員>

2016年10月1日現在

(◎委員長、○副委員長)

徳田 雅明 (オフィス長) ◎  
ロン・リム (副オフィス長・留学生センター長) ○  
熊谷 信広 (インターナショナルオフィス客員教授)  
高水 徹 (インターナショナルオフィス講師)  
塩井 実香 (インターナショナルオフィス講師)  
正楽 藍 (インターナショナルオフィス講師)  
寺尾 徹 (教育学部教授)  
佐川友佳子 (法学部准教授)  
R. R. ラナデ (経済学部教授)  
和田 健司 (医学部教授)  
郭 書祥 (工学部教授)  
川村 理 (農学部教授)  
佐藤 勝典 (地域マネジメント研究科准教授)

香川大学インターナショナルオフィスジャーナル第8号  
Journal of Kagawa University International Office, Vol.8

発行 2017年5月31日

発行者 香川大学インターナショナルオフィス  
〒760-8521 香川県高松市幸町1-1  
TEL: 087-832-1194  
FAX: 087-832-1192

印刷所 株式会社ムレコミュニケーションズ  
TEL: 087-822-2600 (代)  
FAX: 087-822-0567, 826-1448



# Journal of Kagawa University International Office

## Vol. 8

### 【Research Note】

Student views of study abroad and international exchange programs:  
Toward program improvement

Tatsumi Sugino, Hiroko Take, Ai Shoraku ..... 1

### 【Survey Article】

The research regarding Developmental Disabilities Association at province of  
British Columbia in Canada: The principle and education in Berwick child development centre

Gota Matsui ..... 15

### 【Short report】

The report regarding academic and students exchange at early childhood education course  
in faculty of education between National Chiayi University and Kagawa University

Hiroo Matsumoto, Toru Terao, Yumiko Takagi, Eiichi Miyazaki, Paul Batten

Yukiya Ikeda, Yoshika Matsushima, Saaya Takahashi, Kazuki Yamaji

Mai Moriyama, Keiko Noda, Ayaka Ogawa, Nene Taki, Gota Matsui ..... 27

### 【Special Report】

Greetings for the 6<sup>th</sup> Joint Symposium

between Chiang Mai University and Kagawa University Masaaki Tokuda ..... 39

General Report on the 6<sup>th</sup> Joint Symposium between Chiang Mai University

and Kagawa University Lrong Lim ..... 41

Social Science and Humanities: Social Environment Studies for Sustainability

Narong Sikhiram, Ratchaneekorn Tongsukdee, Rajchukarn Tongthaworn

Nutjira Busadee, Yumiko Takagi, Paul Batten, Toru Terao, Satoshi Murayama

Akihiro Sato ..... 43

Economics and Business Ravindra Ranade and Roengchai Tansuchat ..... 45

Medicine and Nursing Supanimit Teekachunhateanl, Kenji Wada ..... 47

Engineering Hiroyuki Tarumi, Chayanon Hansapinyo ..... 49

Agriculture Sessions Osamu Kawamura, Tri Indrarini Wirjantoro ..... 51

Report on the Panel Session Lrong Lim ..... 53

Poster Sessions Report Nobuhiro Kumagai, Sawako Ikeda ..... 55

Field Trip to Higashi-Kagawa City Koji Ueta ..... 57